

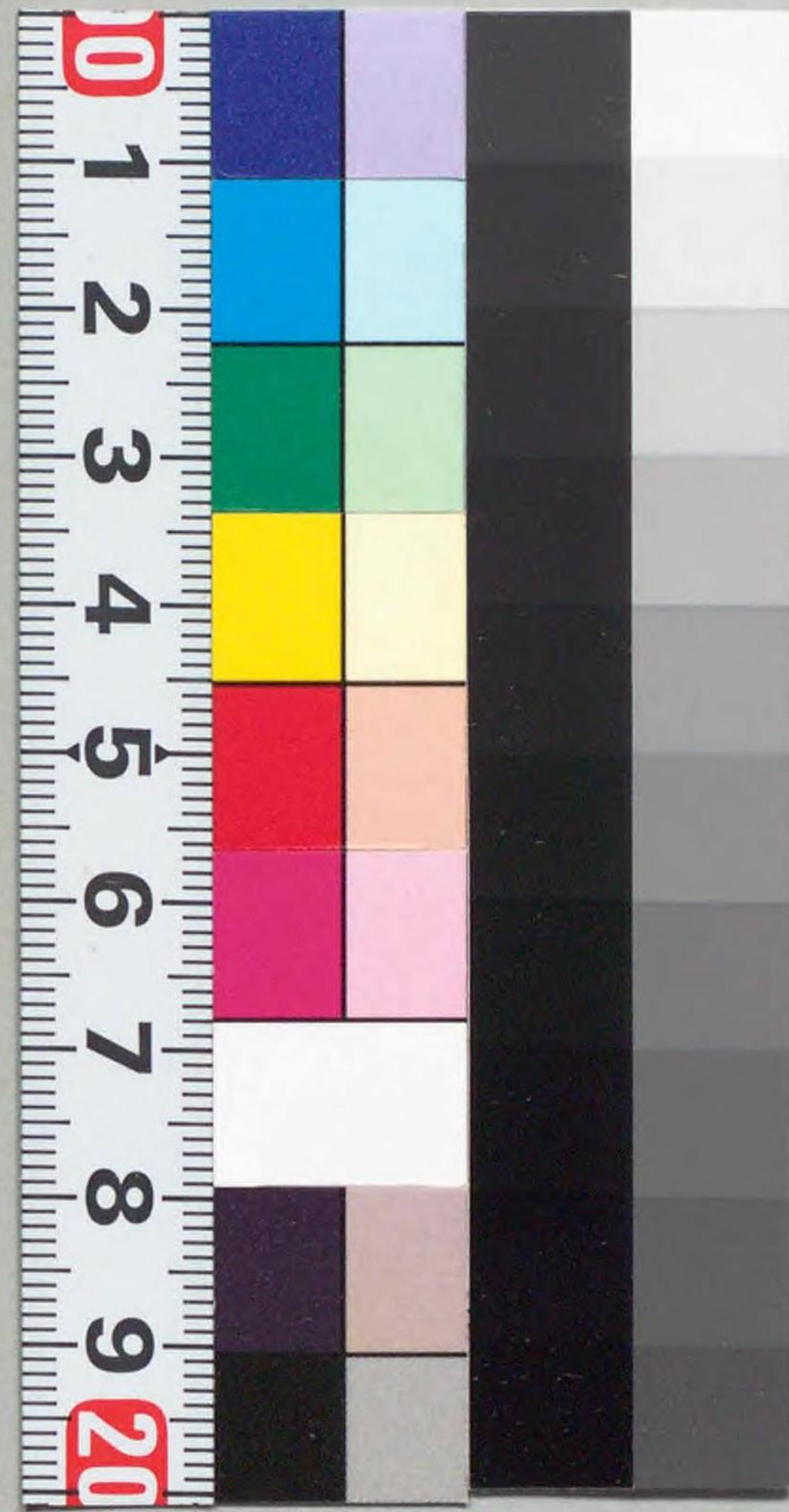
少年探偵小説

# 水中の殿堂

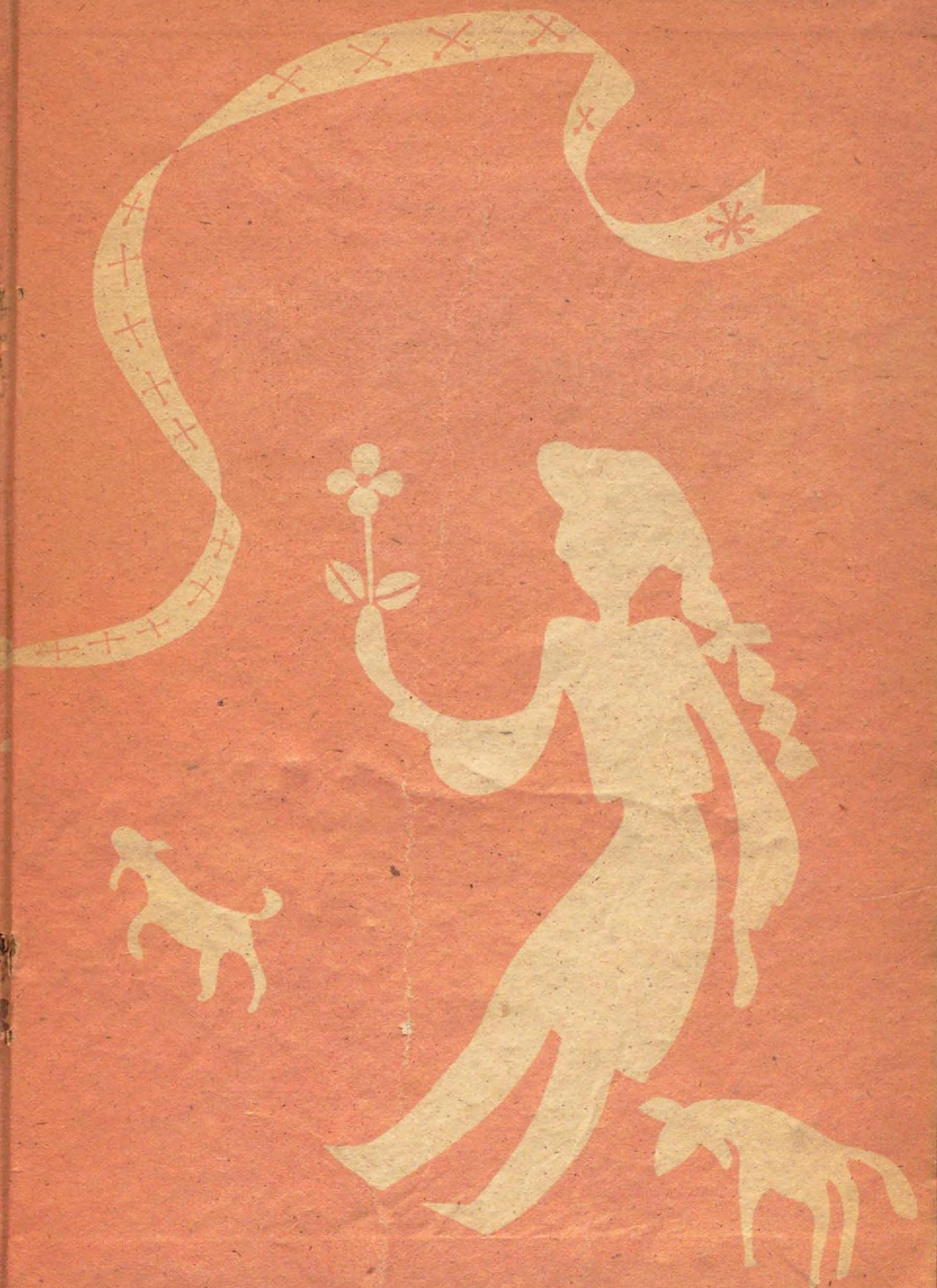
野村胡堂



児  
N





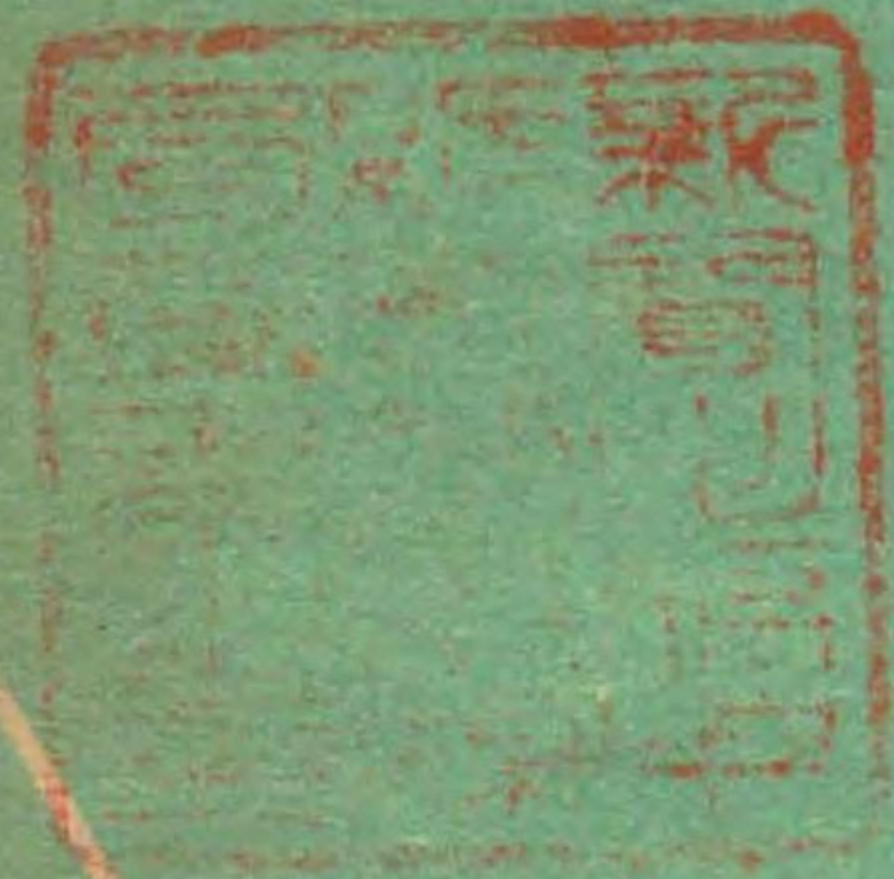




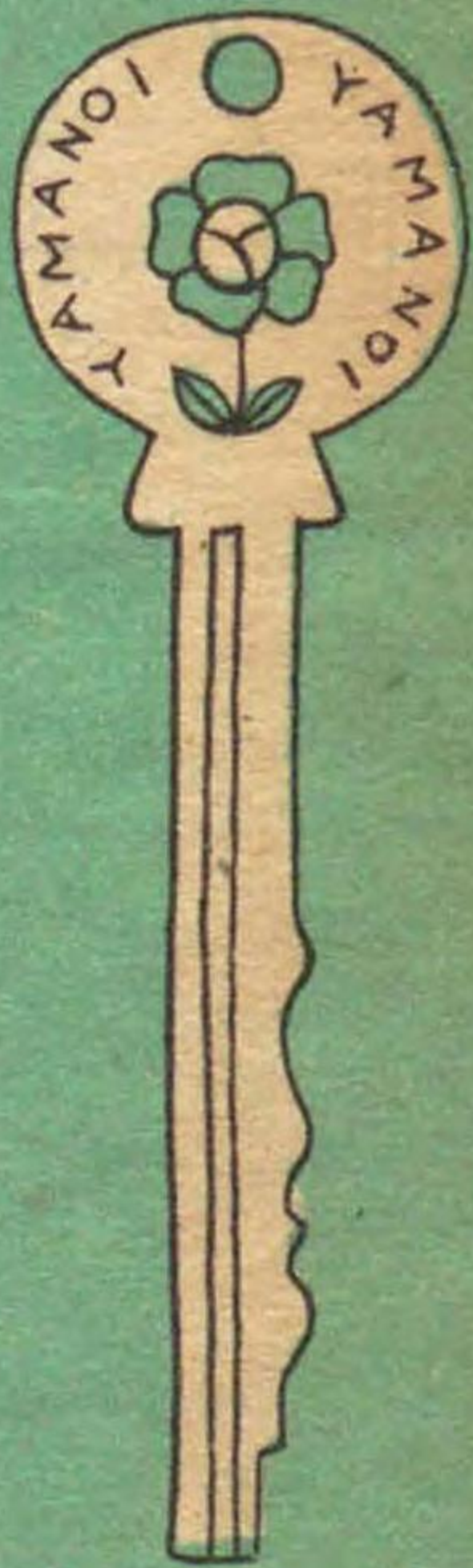
少年探偵小説

# 水中の殿堂

野村胡堂著



駿台書房





48

N-404



814539

目次

眠り人形 ..... 五

向日葵の眼 ..... 三

水中の殿堂 ..... 六





眠  
り  
人  
形

装  
幀  
  
富  
田  
千  
秋



(一)  
『お母様、泣いていらつしやるの？』

よし子は下からのぞくやうに、母親の顔を見上げました。

『いえ、泣きはしません、なんにも泣くやうなことはないぢやありませんか。』

『でも、お父様の形見が一つづつなくなつてゆくのが心細いつて、昨日小父様へ泣いておつしやつたぢやありませんか。』

『この子はまあ。』

母親は顔をそむけて、そつと涙をふきました。お正月の銀座はまだ宵の口ですが、身を切るやうな寒い風が街の石疊の上に、後から後からと砂ほこりの渦を巻いて、悲しい事がなくとも、つい涙のしみ出るやうな嫌な晩でした。

三十五六とも見える、やつれ果ててはをりますが、なんとなく上品な婦人と、とつ

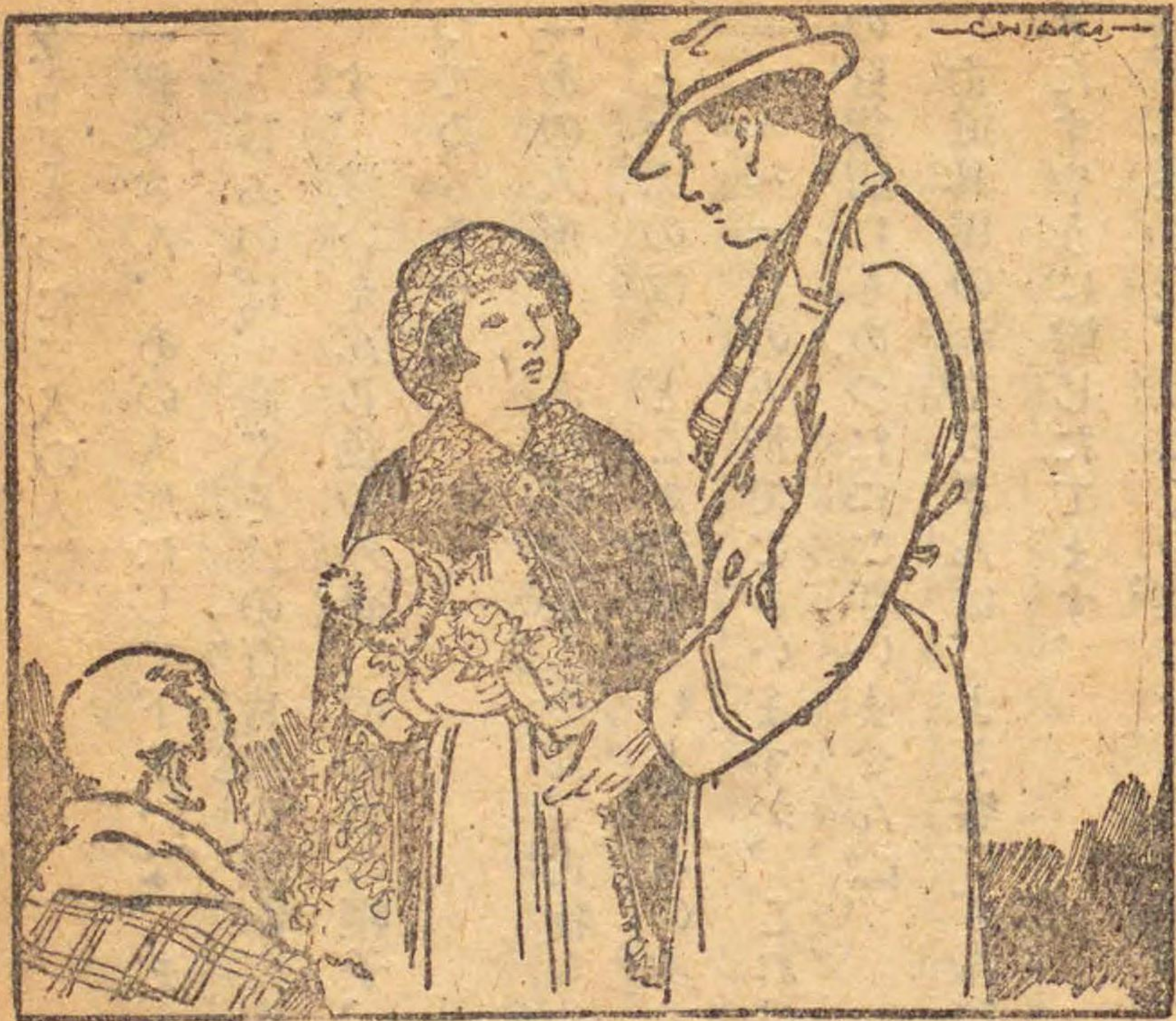


てやうやく十一になる、可愛らしい娘のよし子とは、街路樹の蔭にうづくまつて、のあかりをさけるやうに、かうしめつばい話をしてをります。

その前には毛氈もうせんが一枚、所々破けたままの上へ、火鉢、小机、置物、眼覚し時計、膳、椀、皿、古茶器、装身具、文具など、いづれも中古から大古まで、中には化けさうなものもまじへて、古道具の貧しい店をひろげ、五十位の人の好きさうな中老人が、ふところ手をしたまま、えりまきにあごを埋めて、ポツネンと坐つてをりました。

『そんな愚痴は言はないことにしようよ、せつかく足をとめた客も、お前さん方の泣き言を聞くと、驚いて逃げだすぢやないか、私はこの通り口銭無しでお前さん方の品をさばいてやるんだ、この上、愚痴を聞かされちやかなはない』

『どうもすみません、つい愚痴つぼくなつて、厭な事をお耳にいれます、ただみたやうに二階を貸して頂いた上、かう品物をさばいて頂いて、本當にお禮の申しやうもありません。』



『イヤ、さう改まつて禮を云はれるときまりが悪い。ところで今晚はこの通り寒くもあるし、客があるか無いかわからないう、もしお前さん方の品が賣れなかつたら、失禮だが明日のお米の代は私が立てかへて上げよう、ポツポツ歸る仕度をなすつたらどうだね。』

古道具屋のおやぢさんは、ひざかけの古けつとの下から、うこん木綿の財布をとりだして、チャラチャラ銅錢の音をさせてをります。

丁度その時でした。古道具屋の店先に



立ちどまつた二人の人影、

『叔父さん、あの人形にして下さいな、まあなんて可愛いんでせう。』

と言ふのは、直ぐそばの百貨店の窓飾の中から飛出したやうな、可愛らしい女の子です、浅いえんじ色の外套ゴウイタウに同じ色の帽子、いかにも健康らしい、身體中にベネが入つてゐるやう。

『あの人形？ あれは加奈ちゃん、古物ぢやないの？』

といふのは、どこか若々しいところのある立派な紳士です。

『へへへこの人形でございますか、これは眠り人形で、これ位になると、その邊の百貨店にもめつたにございません。』

古道具屋のおやぢさんは、よき客ござんなれと、毛糸の汚ないえりまきから首をぬきだすやうに辯じたてます。

『道具屋さん、私はこの娘にお人形を買つてやる約束をしたんだが、この邊の百貨店

と玩具屋をあさり盡しても、どうも氣に入つたのが無いんだよ。決して高い安いを言ふのではない、せつかく買つてやるなら、この娘の氣にいつたのにしてやりたいと思つて、とうとう忙しい日を半日つぶしてしまつたんだ。ハハハハハ。』

若い紳士は快活に、わだかまりもなくかう笑ひます。

『とんでもない、お嬢様のお目が高いのでございますよ、これはさるお方がアメリカからお土産に買つて來られたお人形で、これ位の眠り人形はめつたにございません、少し身體を動かすと、マンマ』と泣くやうに出來てをります、この通り——』  
人形を箱から出してやると、なるほど可愛らしい聲で、

『マンマ』

と泣きます。

『叔父さん、この人形にしませうよ、ネ叔父さん。』

加奈子は若い叔父さんの外套にすがりついて、もう鼻を鳴らさなければかりです。



『そこで値段は？』

『十圓頂きます。』

『なに十圓？ 少し高くはないかネ』

『いえ、決してお高いことは申しません、新しいとどうしても五十圓より下ではお求めにならない品で、それに出も確かですから、古と申しても決してお心持の悪い品ではございません——』

(11)

古道具屋のおやぢさんはフト後ろを振り向いて、街路樹の下に額を突き合せて涙にふけつてゐる可愛さうな母子の方を眺めやりながら、ためらひ勝ちに言葉をつぎまじ

た。  
『こんな事は申し上げていいかどうかわかりませんが——この人形ばかりは、一錢も

私は口錢を頂きません、十圓に賣れば十圓、そのままをつくり、此處にをる二人の方へお渡しするのです。』

不思議な古道具屋の言葉に、若い紳士は思はず好奇の眼を見はりました。

『といふのは、かうしたわけです。この方の御つれ合ひが十年間もアメリカで働いて、たいそうお金を貯めたさうで、つい三ヶ月ばかり前に、そのお金を持って不意に歸つて來られたのです。十年間音信不通にしてゐたのにも、いろいろわけがあるさうですが、とにかく母娘の喜びは申すまでもありません、横濱まで出迎へて、久しぶりの父なり夫なりに逢つた二人は、天にも昇る心地で、三人一緒に歸つて來ると、櫻木町の驛で後ろから自動車で追つかけて來た紳士が、この方の御主人と知り合ひのやうで、なんか話しこんでゐられたさうですが、話しが容易に決らなかつたものと見え、(暫く其處まで行つて來るから、驛の待合室で待つてゐてくれ、ほんの三十分もしたら歸つて來る)とその追つかけて來た人の自動車に乗つて行つてしまつたのださ



うです。

それからの事は、申し上げるだけでも涙がこぼれます、三十分と言つたのが、一時間たつても、二時間たつても歸らず、日が暮れても、夜が更けても歸らず、省線の終電車が出てしまつたのでやうやく停車場の外へ出たさうですから、その日お二人は十二時間以上も、御主人の歸るのを待つてゐたわけです。

それから三月、身を焦すほど待ちましたが、御主人はどうとう姿も見せません、申すまでもなく警察へも捜査願を出しました。知り合へは全部手をまはしましたし、あらゆる手段を盡して探しましたが、十年目で姿を見せて、たつた一時間ばかり母子を喜ばせた御主人はそれつきり、この世界から姿を隠してしまつたのです。

その上にまた不思議な事がありました。

それから二週間ばかりたつた或日のこと、どこから誰が出したともわからぬ一つの鞆が、母子の手もとへ届けられたのです、持つて來たのは車夫風の男で、はふりこむ

やうに渡して、そのまま姿をかくしてしまひましたが、その鞆といふのは、御主人が横濱へ上陸した時持つてゐた品で、中には、手廻りの道具が少しばかり、それに、この人形が一つ入つてゐたのださうです。

さつそく警察へ届け出ると、警察の方も非常な意氣込で、新しくまたさがして下さいましたが、矢張り雲をつかむやうで、御主人の行方は手がかりもありません。

その内に母子の方は貯金をすつかり無くして、その日の暮しにも困るやうになり、僅かの知合をたどつて、私共の二階に同居されたのはツイ一と月ばかり前の事です、私が古道具屋をしてゐるところから、持つてゐる品を一つ一つ賣つて上げては、やうやくその日その日をしのいでありますが、一つ一つ主人の形見の品の無くなるのは、身を切るより辛いと言つてゐます。これもまたいたし方がございません。

せめて私の露店に、御主人の持物が並んでゐる間、母子二人で此處に出て來て、もしや、この品を見知つてゐる方があつて、それから御主人の行方の手がかりでも見つ



からないものでもない、頼みにならない  
い事を頼みにして、かう毎晩お二人で出  
てゐられるので、御主人の形見の品を買  
はれる方がある毎に、私からこの話を申  
し上げて、念のためにお尋ねしてゐるの  
です、——もしや貴方は「松澤彦次郎」と  
いふ者を御存じはありませんか——と。  
これはこの方の御主人の名前なのです。  
私も見らるる通りの大道商人で、志は  
あつても何うすることもできません。』  
長物語を終つた古道具屋のおやぢさん  
は、ひざ掛に目を落して、ホトツと太息



をつきました。

『氣の毒な話だ、松澤彦次郎さんと言つたネ、なんかの折に聞込むことでもあつた  
ら、早速お知らせして上げよう、まあまあ力を落さずになさい——。  
それはさうと今の人形だ、話を聞いては負けろとも言はれまい、十圓で私が買つて  
行きませう。』

若い紳士は、かう言ひながら外套のボタンを外して、大きい紙入をぬき出します。

『あら叔父さん、たつた十圓ではお氣の毒よ、二十圓で買つてお上げなさいよ。』

加奈子は高慢な口をきいて、叔父さんの顔を振りあふぎます。鈴を張つたやうな瞳  
には、眞珠のやうな涙を一パイためて——。

『古道具屋の言ひ値より高く買ふ客といふものはないね、まあいいや、加奈ちゃんに  
やるお年玉だから、加奈ちゃんの氣のすむやうにさしてやらう。』

十圓紙幣が二枚、紳士の指先に抜き出されて夜風にふるへます。



『お母様、こんな人形を買つて頂いたの、可愛らしいでせう。』

『まあ、立派なお人形ですこと、叔父さんによくお禮を申し上げて？』

加奈子の抱き上げた人形の見事に、母親も思はず目を見張りました。亞麻色の毛を房々と下げて、淡紅色さきいろの絹服を着たママー人形の可愛らしさは、誰でもほほ笑ますにはゐられません。

『それがね姉さん、大道の古道具屋で買つたんですよ、おまけに十圓といふのを、加奈ちゃんのお聲掛りで、二十圓に買はされたんだから世話はない。』

『まあ。』

優しい母親は、二の句がつけないといふ様子で、娘のふところにかいいだかれてゐる、見事な人形を眺めました。が、フト氣がついた様子で、

『加奈子さん、一寸そのお人形さんをお見せなさいな、少し眼が小さいやうだが、私の心持かしら。』

母親は手をさしのべましたが、思ひ直した様子で弟香椎六郎かすいの顔を見ました。いかに眞實の弟でも、折角娘に買つてくれたお年玉に、けちをつけては濟まないと思つたのでせう。

『姉さん、私もそれに氣がついてゐたんだ、眠り人形だから、寝かしてる時眼をつぶつてるに不思議はないが、起しても半眼に眼を閉ぢてゐるのはをかしい。こんな人形はたいてい起すと大き過ぎるほど大きい眼をパツチリ見開くものだが——』

香椎六郎も同じ疑を持つてをります。

『あらいやよ、みんなでこの人形さんの悪口を言つては。私お名前をつけるの、何んとしませう、——玉子としませうか、猫の子見たやうね、——春江さんはどうでせう、あんまり人間見たやうで變ねエ——西洋風のお名前はどうでせう？ メリーさんとし



ようかしら、——叔父さん、外にいいお名前はなくつて？」

加奈子はもう他愛もありません。

「加奈ちゃん、一寸お見せな、その人形にどうも腑に落ちないところがある。」

香椎六郎は、少し嫌がる加奈子の手かち、お人形を取り上げて、

「眠り人形が眼を開けたり閉ぢたりする仕掛けは、眼玉の裏に針金を付けて、その先に分銅が付いてゐるためだつたね——、その分銅は丁度人形の口の奥にあるはずだ、寝かすと分銅が上るから人形のまぶたを閉ぢ、起すと分銅が下るから、人形のまぶたが開くやうになつてゐるわけだ。起しても半分しか眼をあかないのは、どつか損じてゐるためではないかな——」

探偵癖のある香椎六郎は、お人形さんを電燈の下へ持つて行つて、その可愛らしい口の中を、電燈の先で見てもりました。

「なんか中に入つてゐるよ、加奈ちゃん、ピンセットはないか。何？ ある、では一

寸貸してくれ、有難う、これでよからう。」

理科の時使ふピンセットの先を、人形のふさい口の中に入れて、中からそつと引張り出したのは、ていねいにたたんだ一枚のパラフィン紙です。

「これだけの物が入つてゐるは、眼を半分しかあかないわけだ、つまらないいたづらをしたものだな。」

一度はポイと捨てようと思つたパラフィン紙の切れ端を何んの氣もなくひろげて見ると、それは丁度銀紙と一しよに巻煙草を包んである三寸四方ほどのパラフィン紙で、その中には、薄い鉛筆で、細かい字が一パイに書いてあるのです。

「これは大變なものだ、どれどれ、

——悪漢に欺かれて向島の或家に押し込められてゐる、電車に近く、深い庭のある、悪漢共の巢窟だ、早く救ひ出す方法をとつてくれ、この手紙はよし子へ土産に買つて来た人形に封じ込めて、悪漢の手下の一人を買収して鞆と共に送り届け



る、人形の眼が開かないやうになつてゐるから、多分氣が付くだらう、悪漢共は私の署名と實印で私の財産を横領しようとしてゐるが、私の眼玉の黒い内は決して署名しないつもりだ、――

加奈ちやん大變だ、これはさつきの古道具屋の話した、松澤彦次郎といふ人から送つた密書だ。』

『叔父さん、どうしませう。』

『大ビラに手紙が書けなかつたので、こんな細工をしたのだらう。買収した悪漢の手下の持つてゐる安鉛筆で、西洋煙草を包んだバラフィン紙へ書いたのだ――、あの人達が見付けなかつたのは、紙片があまり小さ過ぎて氣がつかなかつたのだらう。』

『叔父さん、まだそんなに遅くはないから、自動車で行きませう、早く助けてあげないと、あの人達が可哀さうよ。』

『よし行かう、とにかく、あの母子に知らせなくては……私一人で澤山だ、加奈ちや

んは家で待つてお出で。』

『嫌、私も行くわ、このお人形さんを持つて。』

加奈子は母の許しを得て香椎六郎と共にそのまま寒い街へとび出しました。

銀座へ行つて見ると、夜店はとうにしまつて、人通りの少い街を、刃のやうな空つ風が、砂塵を卷いて、ヒューヒュー吹き捲つてゐるばかりです。

警察へきいたり、夜店の地割をする世話人にきいたり、やつと龍泉寺町の古道具屋の家をつきとめたのは、その夜ももう夜半近くなつた頃でした。

幸ひ古道具屋は家に歸つたばかり、未だ寢てをりません、門口でつかまへて事情を話すと、これも飛立つやうな喜びで、

『そいつは大變、とにかく二人にしらせてそれから警察へ届けませう。』

と三人一と塊りになつて、恐ろしく急な梯子はしを二階へかけ上ると、

『アッ。』



何があつたんでせう、三人は思はず梯子段の上に立ちすくんで顔を見合せました。

(四)

話は少し前に戻ります。

人形が賣れて、思はぬお金が手に入った貧しい母親と娘のよし子は、一と足先に龍泉寺町の古道具屋さんの二階に歸りました。

古道具屋さんも随分貧しい暮しでしたが、よし子とその母親の暮し向は、とてもお話にもなんにもなりません、建てつけの悪い六疊ほどの部屋のある中にある物と言つては、鉢巻をした七輪と、口の缺けた土瓶が一つづつ、はげちよろのお盆が一枚と、茶碗が二つ三つ、それだけ、あとはなんにも無いのです。

この寒空に、炭のかけらが一つ無いのは先づいいとして、押入をあけても、その中には今夜着て寝る布團さへもなかつたのです。

貧乏にもいろいろありますが、世の中にはこれほどドン底に落ちこんだ貧乏があるでせうか。十年越しの女世帯にさいなまれた上、一寸横濱で逢つたばかりの父親を探すために、何もかもはふり出して、本當に母子共ふたご双子縞じまの袴一枚になつてしまつたのです。

それでも十燭の電燈が一つ、宿主の古道具屋の好意で、この貧しい部屋を照してをります。その下に坐つた母親、——見る影もなくやつれはてた母親——は、手に持つて來た新聞紙の包を開いて、娘





の方へ押しやりました。

『さあ、しつかりお食べなさい。』

中には、おいしさうなおすしと、もう一つは菓子、明日のお米に困る人にしては、無分別な買物ですが、これには何かわけがあるのではないでせうか。

母親は一目見たつきり一つもつままうとはせず、涙ぐましい眼でじつと娘の食べるのを眺めてをりました。

『お母様も召し上れな、このおすしは、それはおいしいのよ、こんな御馳走はするぶん久しぶりねエ。』

『しつかりおあがりよ、私はどうしたものがちつとも欲しくない。』

『どうしたんでせうね。』

『多分、おなかが悪いんでせう——それはさうと、お母様はこんなに身體が弱いし、何時どんな事があるかわからない、若し萬一の事があつたら、よしちゃんは、下の小

父さんに頼んで、何處かに奉公にでも出してもらつて、氣長にお父様の行方を探しておくれよ。』

『いやいや、そんな事を言つちや。』

『でも、一應は言つて置かないと氣になります、なまじつか私といふものが無ければ、下の小父さんはじめ、遠い親類達も、世間の人も、かへつてよしちゃんに目をかけてくれるでせう、私はもう、——

私はもう生きてゐる力も根もない——』

『いやいや、お母様、そんな氣を落しちやいや。』

虫が知らせるといふのか、小さいよし子にも、母親のそぶりが腑に落ちない事ばかりで、若しかしたら、母親は死ぬ氣ぢやないかといふ恐ろしい疑が、娘心を眞つ暗に

『お母様、死んぢやいや、お母様。』



二人は、ひしと抱きあつたまま顔を見合せました。やせ細つた母親の膝に、たつた三つになる兒のやうに、抱かれた娘の顔には、可愛らしさと美しさの中にも、限りない恐怖が焼きつけられて、その唇はいぢらしくも慄へ、その眼は涙さへかわいて、母親の顔をむさぼるやうに眺めてをります。

たつた十一になつたばかりの娘の顔に、この恐ろしい苦悶の色を讀んだ時、母親の胸には、どんな苦しい思ひをしてもこの娘のために、最後の一滴まで命の油を燃やして行かうといふ心が、勃然として湧き起つたのです。

『よし子さん、私が悪かつた、許しておくれよ、もう決して死なうとは思はない、お母様はどんな事があつても生きて、よし子さんを立派に育てて行きませう。死んでなるものか、石にかじりついて、私は生きて行きます。』

『お母様、本當？ お母様、死んぢやいやよ、お母様、お母様。』

よし子の眼には、始めて湯のやうな涙が湧きこぼれました。

『許しておくれよ。』

『お母様。』

ひしひしとすがりつく二人の胸は、貴い涙でぐつしより濡れてしまひましたが、何時の間にもやら恐怖はあらひながされて、何とも言へぬ安らかさが、二人の胸にしみ込んで行くのでした。

x x x x

香椎六郎と加奈子と古道具屋のおやぢさんは、この中へ飛込んでしまつたのです。

そして、母を死神の手から引戻さうとしたよし子のま心、わが子のためにとこまでも世の荒波と戦つて行かうと思ひ定めた母親の愛情は、三人の者を、すっかり泣かせてしまつたのでした。

あとはもうお話するまでもありません。

人形の口の中から出た密書を持つて、警察へ届け出ると、數十名の警官隊は時を移



さす向島へ出動しました。電車に近く、深い庭のある、悪漢の巢窟さうくつといふと、警察官には直ぐわかりました。

その夜も曉方、悪漢の巢窟を包圍はうゐした警官隊は、居合せた悪漢十數名を一人残らずしぼり上げて、奥の座敷牢のやうな場所に、三ヶ月近く押込められてゐた、よし子の父松澤彦次郎を無事に救ひ出しました。

夫婦親子、思ひもよらぬ對面に、よし子と母親の喜びは申すまでもありません。

松澤彦次郎は思ひの外の大金持でしたので、よし子等の生活はすぐ安らかになりました、そして、加奈子から改めて眠り人形を返してもらつて、この恐しい三ヶ月の記念に、大事の上にも大事にしてをります。

加奈子が、よし子の一番いいお友達になつたことは申すまでもありません。そのうちに折があつたら、二人でとつた可愛らしい寫眞をお目にかかせう。





### 麗子の嘆き

「あら、麗子さん、どうなすつたの。」

「あッ、加奈子さん。」

「近頃學校へもいらつしやらないし、みんなで心配してゐてよ、——それに顔色も悪いわ、どうなすつたの本當に。」

「困つた事が起つたの、加奈子さん、私どうしたらいいでせう。」

加奈子は、お使ひに行つた歸りの上野の竹の臺で、お友達の麗子にバッタリ出逢つたのでした。

麗子は、加奈子と同じ年の十五、小學校からズツト親しいお友達です。

「困つた事つて、どんな事なの、聞かして頂戴、——ネ。」

「大變な事なの、お母様が見えなくなつたの。」



『エッ。』

加奈子は、自分の耳を疑ふほど驚きました。麗子の母親なら、松井理學博士の未亡人<sup>みはうじん</sup>で、麗子によく似た物靜かなやさしい方、加奈子もよく知つてをります。

『いつ？ どうして、——もつと詳しく話して頂戴——』

加奈子はせつかに問ひかけましたが、麗子は返事の代りに、両手の袖を顔にあてて、往來に立つたまま、さめざめと泣き出してしまひました。

陽は少し晝をまはりましたが、公園の中は、あんまり人通りもありません。

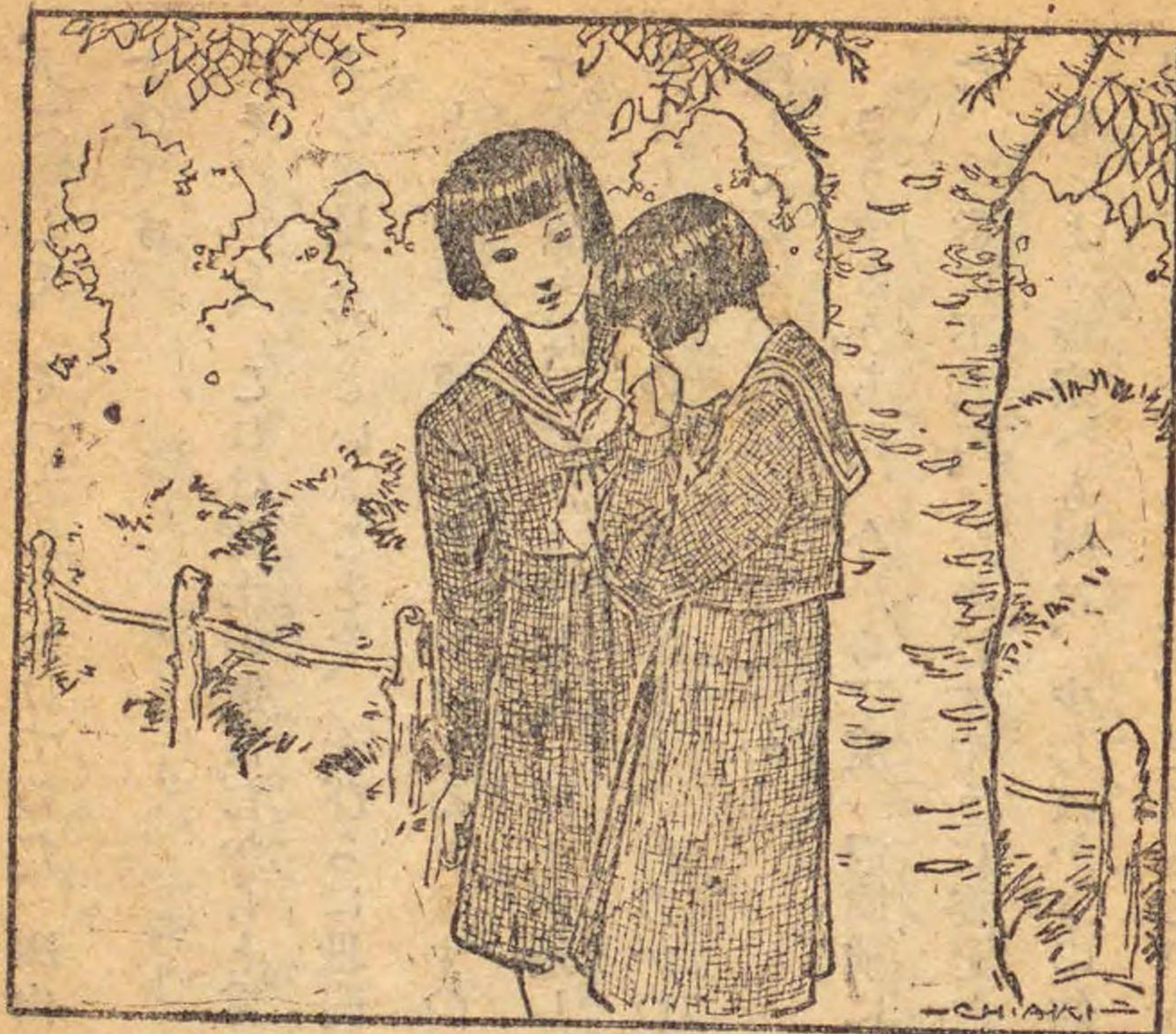
むせび泣く麗子をたすけて、深い木立の中のロハ臺に陣取つた加奈子は、涙のひまから、やうやくこれだけの事を聞きました。

麗子のお父様といふのは、有名な發明家で、いろいろのものを發明した上、澤山の實用品をつくり出して、一代に數百萬といふ財産をこしらへ、谷中の奥に立派な家を建てて、心靜かに研究をしてをりましたが、去年の暮、風邪から肺炎<sup>はいえん</sup>を起して亡くな

つてしまつたのです。

後に残つたのは、未亡人と一人娘の麗子ばかり、偏屈な學者の事で、日頃あまり知合もつくらず、みよりの者と言つても皆遠方で、べつだんに頼りにする者もありませんので、自然お父様の助手をしてゐた、紺野左一郎<sup>こんのさいちろう</sup>といふ人が、研究の仕残りやら家政上の事やら、母子の者の身の振り方まで、立ち入つて世話をするやうになりました。

まもなく紺野は、亡くなつた松井博士の仕事を上げるといふ口實で、博士が





人に隠して、そつとやりかけてゐた、澤山の大發明の設計圖を見せてくれと言ひ出したのです。34

それから、これは博士の遺言だからと言つて、財産の事にまで口を出し、自分は母子の後見人だといふことを、大びらに世間へ言ひふらしたりするやうになりました。

ところが、博士がやりかけてゐたはずの、澤山の發明の設計圖は、どこをどう探しても見當らないばかりでなく、博士が残したはずの、何百萬圓といふ財産も、何處へかくしてあるのか、さつぱりその行方がわかりません、博士はどこか、祕密の部屋に隠してゐるのではないでせうか！

さうするうちに、今から丁度一週間前に、麗子の母親は不意に行方不明になりました。本當に不意に、かきけすやうに姿をかくしてしまつたのです。

もとより警察へも届け、少しばかりの知り合ひは言ふまでもなく、遠方の親類へも問合せもらひました。が、それもこれもみんな無駄骨折で、麗子の母親は、死んだ

とも、生きてゐるとも、今にまだ様子がわかりません。

麗子の歎きはどんなでしたらう。

お母様が、生きてゐるか死んだかもわからず、おまけに身寄りも知り合も無く、たった一人ぼつちにされてしまつては、十五になつたばかりの麗子には、とても背負ひ切れないほどの恐ろしい運命です。

北海道の奥には、たつた一人、年とつたお祖母様がいらつしやるさうですが、あんまり遠過ぎて、何分急場の役には立ちません。その上、紺野は多勢の雇人に片つ端から暇をやつて、お城のやうな廣い屋敷に、麗子ただ一人残るやうにしむけて行くのです。

このうへ淋しい空屋敷にゐるより、思ひ切つて、北海道の奥の年とつたお祖母様のもとへ行かう、麗子は悲しくもかう決心して、そつと邸を抜け出し、上野停車場へ行かうとしてゐるところだつたのです。



## 指環の文字

『まア、そんな事があつたの、するぶん大變ね、だけど、もう少し踏みとどまつて、お母様を探す氣にはならないこと？』

加奈子は涙にぬれた麗子の手を取つて、力を吹き込むやうにかう申します。

『どうして私に探せるでせう、加奈子さん、教へて頂戴な。』

麗子がかう言ふのは、わけのあることでした。やさしい弱々しい麗子にくらべて、加奈子は、明るく強く、怖れといふものを知らないやうに生れついた少女でした。その上、クラスのむつかしい事、判らないことをはじめ、紛失物まで探し出して、近頃は頭の良さを學校中で評判されてゐるやうな有様だつたのです。

『サア——』

加奈子は、その可愛らしい頬に両手を當てて、考へこみました。木の間をもれる眞

晝の陽は、おかつばの髪の上に落ちて、びろうどのやうな毛並、その美しい首すぢをクツキリ照してをります。

『あなたのお母様のお書きになつたものがなかつたの、書置とか手紙とか——』

『何んにも、——紺野は一生懸命探したけれど、手紙一本、日記一冊見つからないつて言つてゐたワ。』

『どうかしたらお母様に、深いお考があつたかも知れないわネ、それでは、貴方がふだんお母様から言ひ含められてゐることとか、預つた品とか、頂いた品とか、とにかく、お母様が大事にしていらしたものはなかつたでせうか。』

『そんならあるワ。』

『えッ。何？ どんなもの？』

せき込む加奈子の前へ、麗子は可愛らしいなめし革の墓口を開けて、その中から蒲鉾形の金の指環を一つつまみ出しました。



『これなの、なんでもお母様がお父様から頂いた指環で、大變大事なんですつて、それをお母様が見えなくなる二三日前に私へ下すつて、この指環は大事だから、一生大事にしまつておくれ、この指環には亡くなられたお父様の魂が刻んでありますよ——つて仰しやつたワ。』

『どれどれ、一寸見せて頂戴な。』

手に取つて見ると、薙銚形の平凡な指環ですが、その上には、見事な向日葵の花が一輪高彫りになつてゐて、その蕊は一カラットもあらうかと思ふ、小さいながら美しいダイヤがはめ込みになつてをりました。

内側を見ると、K18といふ極印の外に、丁度ダイヤの裏側へ、何やら細かい文字が毛書きに彫つてありますが、加奈子の良い眼で見てもこれは讀めません。

『麗子さん、この裏にはつてある字を讀んだことがあつて?』

『いいえ。』

『何んと彫つてあるのかしら、蟲眼鏡があるといいいけれど、——』

加奈子は思はず四邊を眺めました、が上野公園の木立の中で、蟲眼鏡を手に入れる工夫は思ひつきません。

『麗子さん、これにはキット深いわけがあるんだワ、お母様だつて、まだ何處かで、貴方が助けて上げるのを待つていらつしやるかもわからないし、北海道なんかへ行つてしまふ時ぢやないと思ふワ。』

『さうでせうか、加奈子さん、ぢや私はどうすればいいでせう。』

『待つてらつしやい、祕密はキットこの指環にあるワ、蟲眼鏡でなくたつて、凸レンズの代りをするものならいいわけでせう、これはどうでせう。』

加奈子は自分の墓口から、穴の明いた十錢白銅を一枚取り出しました。

直ぐ近くにある水道の口から、指の先へ水を一滴受けて來て、それを十錢の白銅貨の穴へたらし込むと、水の滴りがそのまま穴を塞いで簡単なレンズが出來上ります。



『毛細管の現象で、凸レンズになるわけよ、指環を拜借——』

指環を受取つて、十錢玉のレンズを通した見た加奈子は、思はず吹き出してしまひました。

『プツ、かへつて小さく見えるワ、——私はなんといふ馬鹿でせう、同じ毛細管の現象でも、これは凹レンズよ、穴の大きさに比べて、水が少なかつたんだワ。』

もう一度その上に水を滴しこんで、水の膜を真ん中で盛り上るやうにさせた上、一生懸命十錢玉の穴から、指環の文字をのぞいてゐた加奈子は、思はず歡びの聲をあげました。

『麗子さん、今度はハッキリ読めさうよ、随分素晴らしい凸レンズね——聽いて頂戴、最初は向の字——その次は日の字——、それから葵といふ字——向日葵と書いて、ひまわりと讀むんでしたね、その次は、に、眼、を、與へよ——續けて讀むと『向日葵に眼を與へよ』となるワ。何んの意味でせう、指環の彫刻も向日葵だけれど、なんか

外に意味がありさうネ。』

『サア——』

麗子には、何んの考もありません。

『これから直ぐ、貴女のお家へ行つて見ませう、さうしたら又何んか氣がつくかも知れない。』

加奈子に勵まされて、麗子もいくらか快活な氣分になつたのでせう、上野から北海道へたつ筈だつたことも忘れて、そのまま谷中の家へ引返してしまひました。

谷中の松井博士の屋敷は、近所の人から『日廻り御殿』と言はれてゐる位で、裝飾といふ裝飾は、何から何まで向日葵づくめで、麗子に案内されて行つた加奈子も、あまりの事にびつくりしてしまひました。

第一門の扉の飾りが向日葵、一步中へ入ると、庭の花壇は向日葵と姫向日葵だらけ。



中へ入つて見ると、壁紙の模様から、カーテンの刺繡から、欄間や欄干の彫まで悉く向日葵で、立派な應接間には、有名な畫家の描いた、眞物の向日葵の繪までかけてあります。

どうしてこんなに向日葵ばかり集めたのかわかりませんが、兎に角、これだけ向日葵が澤山あると、どれに眼を與へていいのか、加奈子には少しも見當がつきません。家の中をぐるぐる一と廻りすると、紺野といふ助手と、その仲間の者でせう。彼方此方を叩き廻つたり探し廻つたりしながら、二人の少女を險惡な眼で、ジロリジロリと眺め廻してをります。『紺野が怪しい』と加奈子は咄嗟に思ひつきました。

『麗子さん、今晚は私の家へ行つて泊りませうよ。』

『さうして下さると、どんなに嬉しいでせう。』

『後は構はないでせうか。』

『ええ、どうせ私がゐてもゐなくても同じことなんですから——』

二人はそのまま連れ立つて、夕暮れの街を電車へ急ぎました。

### 香 椎 六 郎

二人の少女から、詳しい話を聞いた加奈子の母親は、どんなに驚いたことでせう。

『まア、可哀相にネ、どんなに悲しかったでせう。』

と我が子のやうに麗子を慰めます。そこへやつて來たのは、加奈子の母親の弟、

加奈子には叔父さんに當る、探偵好きの若い理學士香椎六郎でした。

『何？ 松井博士のお嬢さん、——松井博士なら僕の大學にゐた頃の先生だよ、それは捨てておけない、よしよし明日朝早くから一緒に行つて、すつかり探して上げませう。紺野とかいふ男は加奈子さんの云ふ通り確に曲者に違ひない。まだまだ泣くことはない——』

さう親切に言はれると、麗子はなほ泣かすにはゐられません。



明る日、朝早く出かけた三人は、麗子の案内で、『日廻り御殿』へ探検の足を踏み入れました。 44

紺野は大勢の仲間を引きつれて玄關から一と部屋一と部屋と片づけて、打ち壊しをやつてゐる様子で、時々、凄じい物音が聞えます。『悪漢め！ 發明の設計の所所を探してゐるんだな。今に鼻をあかしてやる』と香椎六郎は微笑みました。そして、香椎六郎の一行がいきなり、紺野達がまだ手をつけてゐない二階へ上らうとすると、  
『これこれ、お前は何處へ行く。』

人相の悪い襯衣裸の男が前に立ちふさがります。紺野もその後についてゐます。

『何處へ行かうと勝手だ、この家の主人の麗子さんが案内してゐるのが見えなにか。』  
『……………』

『お前こそ何者だ、誰の許を受けて、そんな亂暴なことをするのだ。』

香椎六郎は逆ネヂを食はせます。スポーツで鍛へぬいた、見事な體格を見ては、あ

まり強さうもない紺野などは、傍へ寄りつけさうもありません。

『無禮を言ふな、松井博士の遺言で私はこの屋敷の管理してゐる紺野左一郎だ。諒解を得ずに、屋敷の中に入ることは許さんぞ。』

『何をッ。』

二人は屹と睨み合ひました。紺野左一郎の後ろには、その仲間らしい荒くれ男が五人、香椎六郎の後ろには、加奈子と麗子、成行如何と固唾を呑んでをりましたが、二人は睨み合つたままスーツと別れて。紺野は玄關の方へ、香椎は客間の方へ足を返します。

家の中は何處へ行つても、向日葵だらけで、流石の香椎六郎も面喰ひましたが、それでも、素人探偵らしく落着き拂つて、客間の名畫、卓の上の巻煙草入れの象眼、梯子段の手摺と、一つ一つ丁寧に調べながら、二階、三階へと登つて行きます。

一時間ばかりで、大方家の中の部屋を見てしまひましたが、向日葵の眼らしいもの 45



は一つもありません。

『叔父さん、判つて？』

『いや。』

加奈子の間にも、簡単に答へただけ、香椎六郎はむつかしい顔をして、屋上へ抜ける狭い段々の下に立つて居ります。

『麗子さん、この上には何があります。』

『屋上庭園です、それから、お父様の小さい実験室もありますが、見るやうなものは何んにもありません。』

『兎に角行つて見ませう。』

香椎六郎は先に立つて、狭い梯子を登り、頑丈な扉を開けて、屋上庭園へ出ました。

とつつきは二間四方程の小さい実験室で、天體觀測か、光學の研究などに使つたも

のらしく、天井の半分ほどは透明なガラス張り、その下へ寫眞屋のやうに幕を張り渡して、そこから入つて来る烈しい陽をさへぎつてをりますが、中には、目ぼしい品は何んにもありません。

卓が一つ、椅子が二三脚、本棚が一つ、その中には本が少しばかり詰つてをりますが、あとは卓の上に大理石へはめこんだ古い置時計が一つあるだけです。

実験室の外は、かなり広いコンクリートの展望臺で、彼方には、道灌山や上野の森やらが、手に取るやうに見えてをります。

『ああ、良い心持だ。』

忙しい中にも、この雄大な眺めに對して、香椎六郎は思はず胸をくつろげます。

『叔父さん、これは何んでせう。』

不意に、加奈子の聲、驚いて指した方を見ると、寄木細工になつた実験室の真ん中の床の上に、二尺四方程の大きな彫刻がはめこまれて、その真ん中の部分が直径三寸



ほど、圓く穴になつてボカリと口を開いてをります。

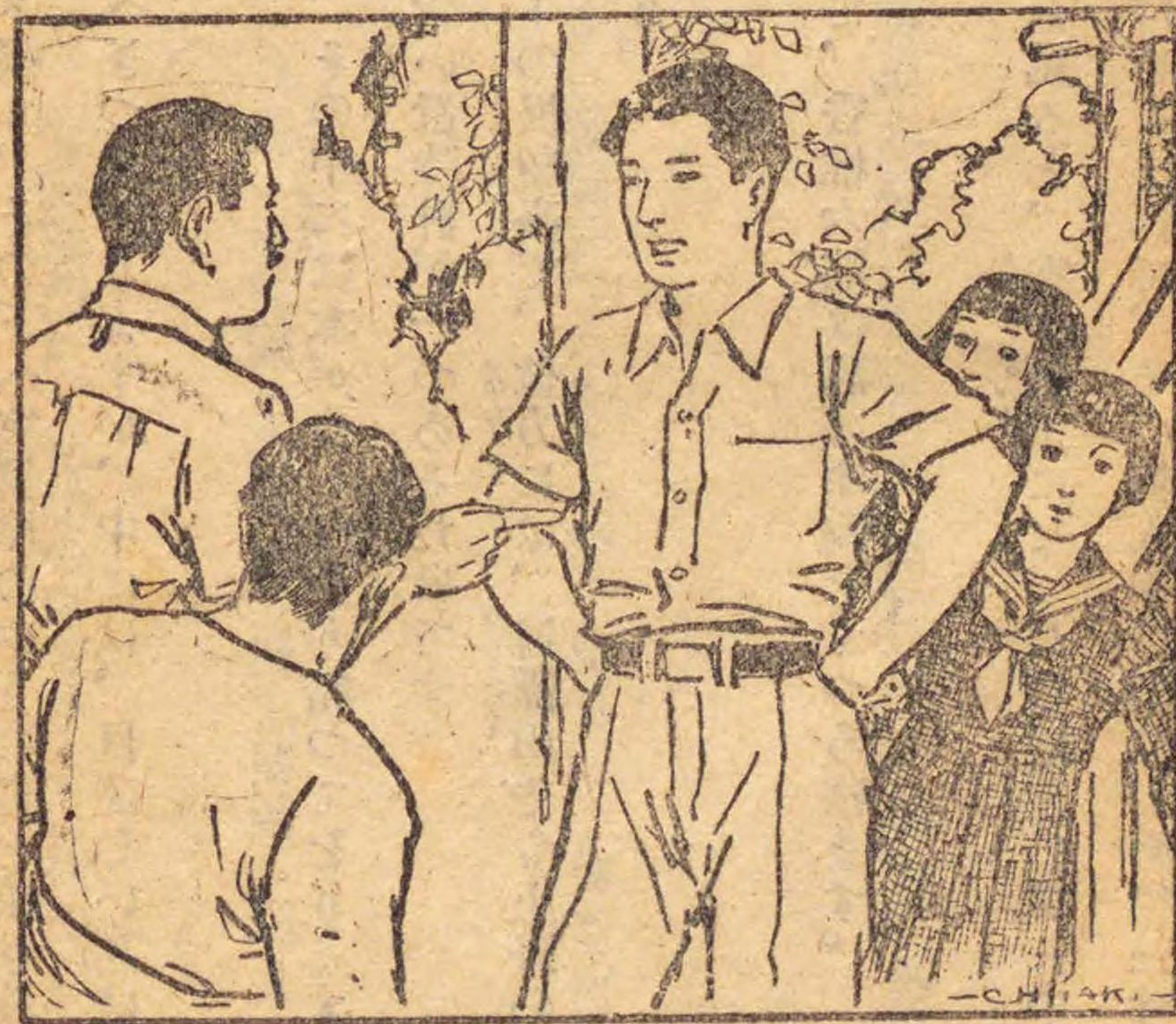
寄木細工が古くなつて、一寸見は判りませんが、注意して見ると、そのはめ込みの彫刻は大きな向日葵に相違ありません。

『向日葵に眼を興へよ——、これだ、これだ。』

香椎六郎は思はず飛上りました。

『叔父さん、眼を興へよつて何？』

『それだよ、その眼が解れば、謎はわけもなく解けるんだ——待て待てもつと明



るくして見よう。』

壁にたれてゐる綱を引くと、天井硝子の下へはつた幕は引かれて、眞晝の烈しい光線が、クワツと床の上に落ちます。

『向日葵に眼を興へよ、——向日葵に眼を興へよ——』

香椎六郎は歌のやうに節を付けたがら口ずさんで、向日葵の彫物の眞ん中の穴へ手を入れましたが、手は眞鍮板らしい金属に遮られて、いくらも深くは入りません。

『麗子さん。大きい凸レンズは無いでせうか、——蟲眼鏡ですよ、——餘程大きいのでないといけないが——』

『ありましたワ。』

麗子は卓の抽斗を抜いて見ましたら、そこは綺麗に空っぽにされて、紙片一つ残つてはをりません。

『階下へ行つて持つて來ませう。ここになれば、お父様の書齋にあつたやうですか』



ら。』

出口の扉へ手をかけましたが、防火のため、薄い鐵板を張つた頑丈な扉が、いつの間にもやら、内側から鍵を掛けられたものと見えて、ピクとも動きません。

### 向日葵の謎

『チョッ。』

麗子に代つて、暫く扉を動かしてゐた香椎六郎は、とうとうあきらめて手を放してしまひました。三人が屋上へ出たのを知つて、紺野の一味が、日干しにする積りで鍵をおろしてしまつたのでせう。

『向日葵の眼といふから、この彫刻の向日葵の蕊しべに當る穴へ凸レンズをはめ込めばいいだらう、麗子さんのお父様は理學の大家だつたから、キットそんなことを考へ出されたに違ひない……何んかレンズに代るものはないかなア——』

香椎六郎が四邊をキョロ／＼見廻すと、

『十錢の穴明き白銅なら持つてゐてよ。』

加奈子はそんなことを言ひます。

『そんな小さいものぢや指環ゆびわの文字もんじは讀めるだらうが、この向日葵の眼にはならないよ、しつかりおし、女探偵さん。』

昨日上野の森の苦心談を聞かされてゐるので、六郎さんはこんな事を言つて加奈子をからかひます。

『あら、叔父さんヒドいわ、——ではこの時計の硝子がらすなら何う——』

加奈子に指されて見ると、卓上の置時計Ⅱとうの昔から止つてゐる大理石の置時計Ⅱの硝子が、不思議なほど見事な曲線を描いて、コンモリ圓くなつてゐることに気がつきました。

『これだこれだ、えらいゾ加奈ちゃん。』



六郎は飛付くやうに時計を取り上げて、その裏の螺旋を引抜き、わけもなく表の硝子を外してしまいました。手に取つて見ると、硝子板は小さいお皿ほどの半圓をゑがいて、丁度掌の中へポトリと入り込みます。

その硝子を床の向日葵の真ん中へ仰向に置いて、

『水だ水だ。』

騒ぐ迄ありません、實驗に付き物の水道は、すぐ鼻の先にあります。久しく使はないので、すつかりさびついてしまつた蛇口を、大骨折でひねつて、コップへ一杯の水を出すと、それを床の穴へ仰向けに置いた時計の硝子のお椀の中へ注ぎ込みます。

時計のガラスは、水を入れると、立派な凸レンズになつて、天井からおちて来る、烈しい眞晝の日光を受けて、向日葵の穴の中へ焦點を落します。

暫らく恐ろしい沈黙が続きました。五分、十分、二十分、三人の顔は不安と期待に緊張しますが、床の向日葵には何んの變化も起りません。

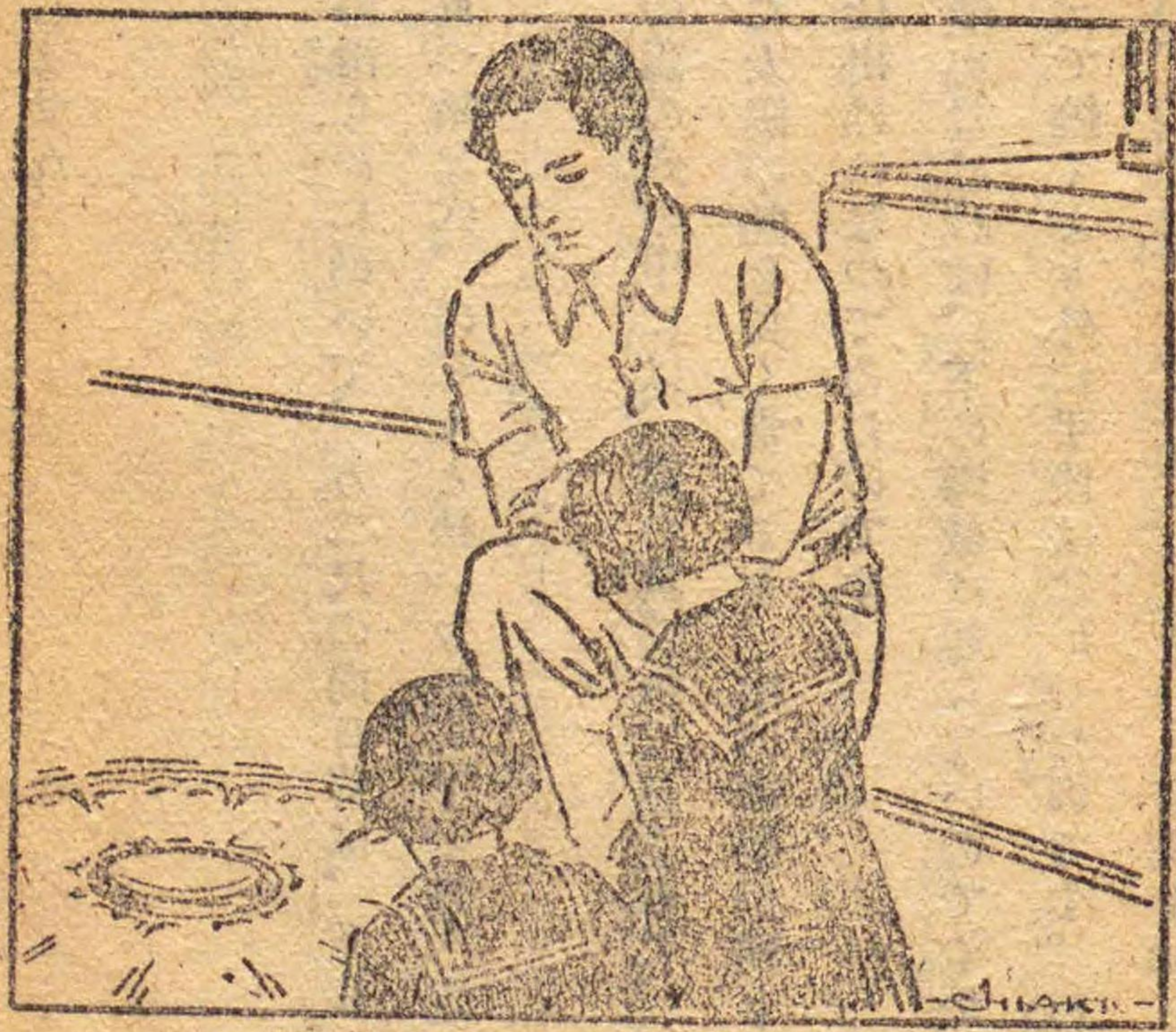
『こんなはずはないが——』

香椎六郎はこらへかねて、急造レンズへ手をかけようとすると、不意に、レンズの下で、玩具の煙火を鳴らしたやうな、不思議な爆音が聞えます。

パン、バラ、バラ、バラバラバラ  
續いて豆を炒るやうな音がすると、驚き呆れてみる三人の眼の前へ、二尺四方もある彫刻が、床から抜け出して二三寸セリ上ります。

『アッ、しめたッ。』

香椎六郎は手をかけて引剥さうとしま





したが、向日葵は床に固着してビクともしません。

『叔父さん螺旋らせんぢやありませんか。』

『成程。』

花瓣くわべんへ手をかけて右へ廻すと、思ひの外滑なめらかに動いて、方二尺の向日葵は、そのままポカリと床から抜けれます。——跡は眞つ暗な穴、のぞくと狭いながら下の方へ走る段々も見えます。

これは後で判つたことですが、向日葵の蕊しべの穴の中には、薄い眞鍮板しんちゆうばんで包まれた、煙火仕掛の爆薬があつて、レンズで集めた太陽の熱を長く當てると、中の爆薬が獨りでに發火して、自然しぜん向日葵を押し上げる仕掛けになつてゐたのです。

眞鍮板の中の極く小さい一點を、長く温めなければ、下の爆發は起らないのですから、これは成程、天氣の好い日に、レンズで焼くより外に手段はなかつたのです。わかつてしまへば、他愛もない仕掛けですが、『向日葵に眼を興へよ』といふ言葉を知ら

なければ、この祕密の戸はどうしたつて開かれるわけはありません。

さて、思ひもよらぬ場所に通路を見付けた三人は、恐ろしさも何も忘れて、その梯子はしを降りて行きました。香椎六郎が先頭、次は麗子、殿しんがりは加奈子、カビ臭い風が顔を撫でて、その氣味の悪さといふものはありませんが、今はもう三人とも緊張し切つて、ろくに口をきく者もありません。

十段ばかり降りると、小さい小さい一つの部屋があります。天井から落ちて来る少しばかりの光線で見ると、コンクリートで塗りこめた金庫室のやうな部屋で、その中には大きい戸棚が一つ、開けて見ると、中にはいろんな設計圖やら、發明の途中にある品物やら、それから、夥おびただしい證券やら、勘定も出来ないほどの現金やらが入つてをります。ああ、ここに、博士が苦心の設計圖と財寶が隠されてゐたのです。

『これだこれだ。』

紺野が探してゐるのは、言ふまでもなくこの戸棚でせう。



「叔父さん、これは何でせう。」

加奈子の囁やく聲に振り返つて、瞳を凝らして見ると、降りて来た方とは反対の壁際に、もう一つ二尺ほどの鐵の扉がついてをります。

引手を廻して引くと、わけもなく開いて、その先に、もう一つの小さい密室があります。

『シッ。』

何やら物の氣配、三人は思はず顔を見合せました。密室の闇の中には、動物とも人ともわからぬものが、僅かにうごめいてゐる様子です。

三人は壁際に身を寄せて、土から落ちて来る光線を入れると、中にゐるのは、正しく人間、しかも中年過ぎの婦人の姿です。

『お母様ッ。』

場所柄も何も忘れて、麗子はいきなり半死半生の母親に飛びつき、薄暗い中に泣き

崩れてしました。

x

x

x

x

加奈子や、香椎理學士の想像通り、紺野は果して悪漢でありました。博士の死後、今迄假面をかぶつてゐた紺野は忽ち悪漢の本性を現はし、博士の残した多くの設計圖や財産をうばひとらうとしたのでした。そして、そして、その在所を探すに邪魔になる麗子の母をこの密室に監禁したのです。

麗子の母親は、一週間も此密室に監禁されて人心地も無いほど弱つてをりました。

悪辣な紺野はこの密室のあることは知つてゐたのですが、其の奥にもう一つの密室があつてそこに、設計圖と財産が隠してあることには氣がつかかなかつたのです。尤も氣がついたところで、そこへは天井の實驗室から、しかもお天氣の好い眞晝でなければ、降りて行くことが出来ないやうな仕掛けになつてゐたのです。

母親と麗子と加奈子を、暫らく第一の密室に留めて置いて香椎六郎は一人實驗室へ



歸りました。そして屋上庭園から、建物の裏手の出張りの庇ひさしを傳はつて、辛うじて下へ飛び降り、一目散に最寄もよの警察署へかけこみました。

時を移さず一隊の警官は『日廻り御殿』を取りかこみました。そして、此時までもまだ、何んにも知らずに財産と設計圖の發見に夢中になつて、見當違ひの方を、片つ端から打ち壊して居た紺野左一郎とその一味の者を、縛り上げてしまつたのです。

密室から救ひだされて、一週間目で天日てんじつを仰いだ麗子の母親は、間もなく人心ついで、娘と抱き合つたまま涙を流して喜びました。

加奈子は首尾よくお友達を救つて、もう一つ手柄話が出来たわけですが、無邪氣な加奈子は、そんな事を別に自慢にもしてゐません。

密室から出たお金と債券は大變な額でしたが、それよりも松井博士の研究しかけてゐた發明の方が大事なものでした。麗子と母親の身の上が安定すると、改めて博士の弟子の香椎六郎が引繼いで、人類の幸福のために研究を續けることになりました。

## 水中の殿堂





父の汚名を雪ぐ大事な使命

「お嬢様、大急ぎで鎌倉の翠川様の別荘へいらしつて下さい。」

「どうしたの、爺や。」

「どうもませんが、夏休になつたら、泊りにいらつしやるお約束ぢやございませんでしたか。」

「でも、爺や、一人で不自由なことはない？」

「私はもう六十八ですもの、どんな事があつたつて驚きやしません。」

「まア、なんかあつたの爺や。」

立花博士の遺児、今年十四になる綾子は、呆氣にとられて正平爺やの顔を見つめました。



『お嬢様、それぢや申し上げますが、——お嬢様が此處にいらつしやると、命が危いんです。』

『そんな事が爺や。』

『今朝、お嬢様のお部屋のバルコニーの欄干の楔が抜けて、お嬢様がいつものやうにもたれば、すぐ外れるやうになつてゐたのを御存じでございますか。』

『まア。』

『あのバルコニーから落ちると、下はコンクリートですから助かりつこはありませぬ。』

『それから——』

正平爺やは綾子の耳に口をよせました。澁紙色の皮膚や白髪になりきつた頭が近々と來ると、小さい時分、この爺やにだかれて、植物園や動物園を遊び歩いた事などを思ひ出して、ツイ綾子の眼は追憶の涙にぬれるのでした。

『お嬢様、そればかりぢやございません。二三日前には——』

正平爺やは、何やら綾子にささやきました。

『爺や、私、怖い。』

『ですから、今すぐ鎌倉へいらつしやいませ。お荷物は後からお届けしますから』

『爺やは？』

『私は此處で見張つてゐなきやアなりません。私がゐなくなつたら、悪者共は、どんな事をやり出すか判りません。』

『でも』

『お嬢様は、大事な大事な仕事を持つていらつしやるぢやございませんか。萬一の事があつたら、廣い世界に、誰がお父様——立花博士の恐しい汚名を雪ぐでせう』

『爺や、行くワ、叱らないでね。』

『誰が、お嬢様を叱るものでせう。とんでもない』



爺やも綾子も泣いてをりました。暫くは白髪頭と鬚髪と、テラスの葡萄の葉蔭に、  
顔きあふやうにゆれてゐたのです。

綾子は名匠の刻んだ『悲しみの塑像』のやうな乙女でした。

父立花博士は、北上川の底から平泉館の寶庫を掘り出す事を考へ出し、大勢から資  
金を集めて仕事に取りかかりましたが、いろいろの手違で失敗した爲、大詐欺師扱に  
されて、未決監の中で死んでしまひました。

それは昨年秋のこと——、後にたつた一人取残された綾子は、迫害と侮辱との中  
に、爺やの正平を相手に淋しく暮して來たのです。

牛込の邸には、博士が死んでから、世間の迫害に驚いて、雇人は住みつきません  
が、それでも、正平爺やの外に、博士の助手をしてゐた瀧山達郎と、その妻の三枝子  
が住んでゐるので、綾子がゐなくなつたところで、なんの差支もありません。

綾子はその日の夕方、鎌倉の翠川家の別荘に着きました。主人は有名な實業家です。

が、長男の健一は水泳の選手で、十八歳になつたばかりですが、幾つかの日本選手権  
を持つてゐるほどの快少年、妹の燿子は綾子の學校友達で、綾子より一つ上の十五、  
これは五月の陽のやうに朗かで、とりたてのトマトのやうな新鮮な感じのする少女で  
した。

翠川一家——健一も燿子も、立花博士の平泉發掘の事には一言も觸れないやうにし  
て、毎日、毎日、唯もう面白く遊びました。

由比が濱の泳ぎ、鎌倉山の遠足、或時は八幡様へ、或時は七里ヶ濱へ、勉強も運動  
も精一杯するといつた生活が、十日ばかりの間に綾子をどんなに快活にしたこととせ  
う。

この生活が一箇月續いたら、綾子の健康も氣持も、すっかり變つてしまふのではあ  
るまいか——と翠川一家の人達が言つてゐたのも無理のない事でした。健一と燿子は、  
健康と快活とをまきちらして歩く、二人の妖精みたやうなものだつたのです。



ところが、思ひもよらぬ事件が、思ひもよらぬ形で現れました。

或朝——、ヴェランダで由比が濱をながめながら、何心なく新聞を讀んでゐた綾子は、

「あッ。」

不意に籐椅子から起上りました。

「百足に刺されて？」

耀子は飛んで來ました。この邊は大きい百足の多いところで、時々それに刺されて大騒動をすることがあつたのです。

「爺やが、爺やが。」

「爺やさんがどうなすつて——まア大變ッ。」

耀子は新聞を取上げて、指さされた記事を一目見ると、これも思はず大きい聲を出してしまひました。

### 故立花博士邸に怪盜

老僕を刺して金庫を破る

助手瀧山某に濃厚な疑ひ——

この標題を見ただけでも、事件の容易ならぬことが判ります。

「私、行つて來るワ。」

暫くすると綾子は、決然として顔を振り仰ぎました。十日あまりの休養で、身體も心も健かになつたのでせう、蒼白かつた頬には興奮の血さへ燃えて、もう此處へ來た時の『悲しみの塑像』といった淋しいおもかげはありません。

「そんな場所へ行つて大丈夫？ 綾子さん。」

耀子の方が心配さうに、綾子の顔を指しのぞくのでした。

「私は意氣地がなかつたんだワ。——あの時爺やがなんと云つても、どんなに氣味の悪い事があつても、東京にゐて、足の不自由な爺やを見てやらなければならなかつた



んですもの。』

『……………』

『あの大事な、記録がなくなつたらどうしませう。』

綾子は矢も楯もたまりませんでした。思ひ立つともう階下へおりて、夢遊病者のやうに長谷の停留場の方へ飛出してをりました。

『綾子さん、待つててね。私も行つて上げるワ。』

耀子はお母様からお許を受けると、丁度空いてゐた父親の自動車に乗つて鎌倉停車場へ綾子の後を追ひました。

『お嬢さん、記録は盗られました。』

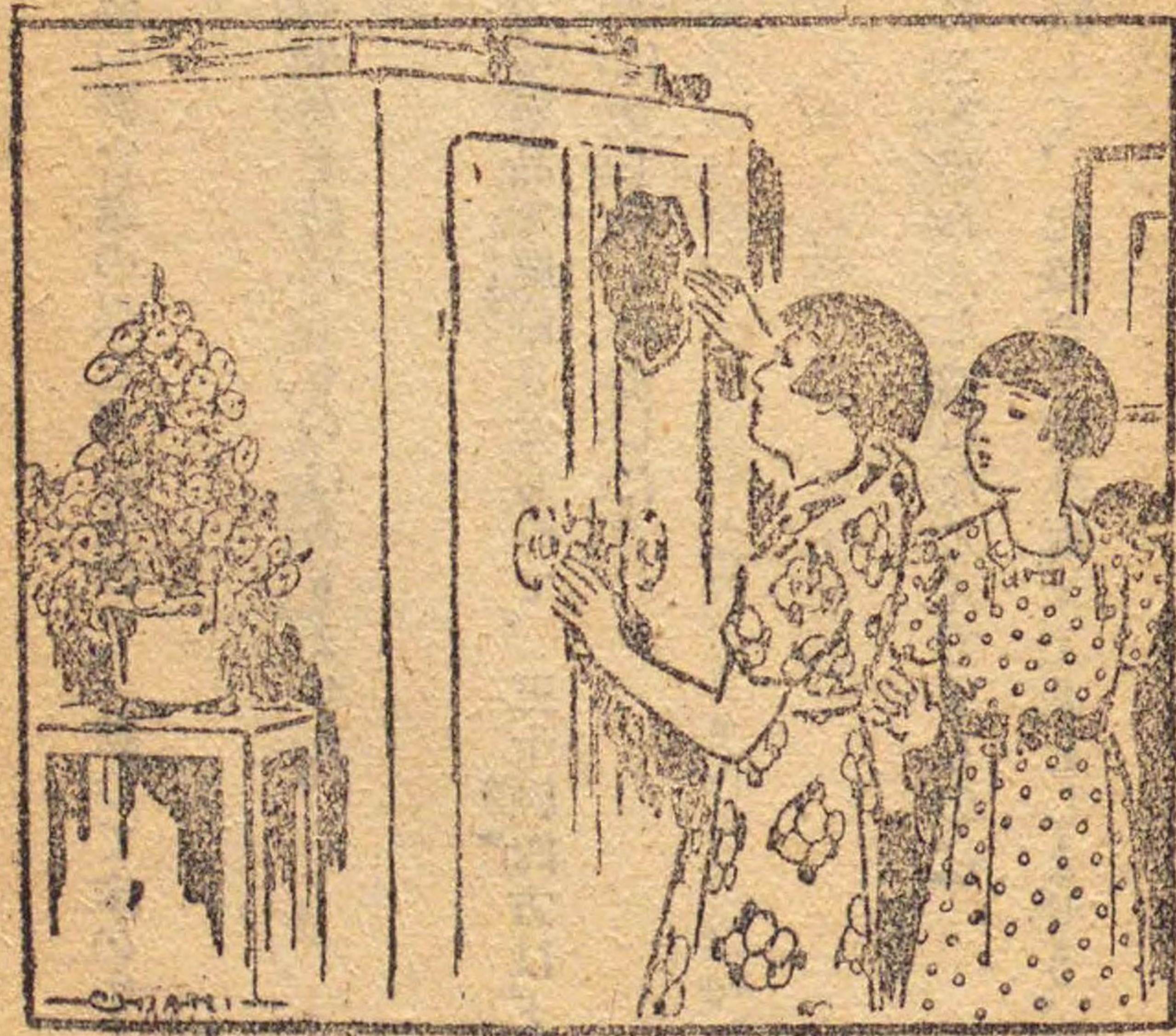
『えッ。』

玄關へ飛んで出た助手の瀧山は、棕櫚箒のやうな頭を指でかき上げながら、少し氣

違じみた眼を見開きました。後からは、差しのぞくやうに、オドオドしたその妻三枝子の眼。

博士令嬢が鎌倉にゐるのが判つてゐるのに、この騒を知らせないやうな人達ですから、老僕の正平が刺されたのより、記録を盗まれたのを大騒するのでせう。

『尤も記録を盗まれなきア、僕が人殺の疑を受ける所でしたよ、——僕はあの金庫を自由に開けられるし、記録も自由に讀めることを證明して漸く許されたんです。』





「……………」

綾子と燿子は、助手の辯解や、制服私服の警官達の眼を背に受けて、黙つて家の中へ入りました。

臨検の役人は引揚げて、もう誰も二人の少女を妨げるものはありません。

「まア——」

梯子段の下に据付けた金庫の上に、強力な薬品で腐蝕させられて、三十糎四方ほどの大穴があいてゐるのを見て、思はず綾子は立ちすくみました。

「どうなすつたの綾子さん。」

後からそつと肩に手を置く燿子。

「あの記録がなくなると、お父様の言つたことがみんな嘘になるんですもの。」

「どうかなるワ、綾子さん、お兄様と相談して、記録をうばひ返す工夫をしませう。」

「……………」

二人は何心なく梯子段の横から、食堂へ入りました。

「あッ。」

中には二人の警官が固めて、重傷の爺やを看護させてをります。

「お嬢さん方の入るところぢやありません。向ふへ行つた、向ふへ。」

二人の可愛らしい断髪の少女が入つて來たのを見ると、警官は驚いて止めましたが、その時はもう駆け寄つた綾子、重傷の爺やにすがりつくやうに、

「爺や、どうしたの。誰がこんなひどい事をしたの。」

ハラハラと涙をそそぐのでした。その時、

「正平が刺されたといふではないか、一體全體、なんといふ事だ。」

玄關から怒鳴りこんだものがあります。

「貴方は、どなたです。」

警官が二人、扉の左右から行手を阻みました。



「いや、これは失禮、ツイ興奮したもので、——私は唐崎莊之介からきさぶろうのすけといふ、なくなつた立花博士の平泉館發掘事業の資金を半分投資した者ぢやが。」

「あの、唐崎商事の。」

「左様。」

唐崎商事の社長——と言へば實業界ではかなり知られた人物です。四十五六の少し古風な頬鬚ほたひげを持つた、堂々たる風采ふうさいが、なんとなくあたりを壓するのも無理のないことでした。

「あッ、唐崎さん。」

と飛んで出て瀧山助手。

「記録はどうした、瀧山君。」

「盗まれました。」

「な、何？ 盗まれた。銅板は紛失まがらひし、立花博士は死に、その上記録を盗まれては、

發掘事業は全く絶望ではないか、いよいよ未決で死んだ立花博士の大詐欺おほまがきを裏書するやうなものだ——それもいいが、一體私の損害をどうしてくれるんだ。」

「……………」

「記録の複寫コピーはないのか、瀧山君。」

「ありませんよ。」

「それほどの大事な記録の複寫を取つて置かないといふのは、君の手ぬかりぢやないか。」

「いえ、盗まれる危険を少くするために博士は複寫を作らせなかつたんです。」

「記録の内容を、すつかり頭に入れて置いた博士はそれでよかつたらうが、我々は困る。兎に角、警察にお願ひして、どんな事としても探してもらふんだな。次第によつては懸賞を出してもいい、一萬圓位なら。」

唐崎莊之介は、金庫も爺やも見ようとせす、そのまま玄關ひんぐらんから引返しました。



「綾子さん、あの人ををかしいと思はない。」

「え？」

唐崎莊之介を見送つて、燿子は綾子の耳に不思議な事を囁きました。

「この家へ始終来るんでせう。」

「え、勝手に入つたりするワ。」

「そんなに懇意なくせに、どうして中へ入つて見ずに、玄關から歸つて行つたのかしら、——綾子さんへ一言も口をきかないのををかしいし、——大事な記録を盗まれたといふのに、金庫の様子を見ようともしないのも變ぢやありません？」

「……………」

「それから、瀧山さんは昨夜爺やさんが刺された頃、何處へ行つてゐたか聞いて下さらない？ 瀧山さんの奥さんは一緒だったかどうか、——もう一つ、瀧山さんが昨夜着てゐた着物を見られないかしら。」

燿子は妙な事を言ひ出します。

### 川底に埋まる平泉文明の遺跡

綾子と燿子は、その日のうちに、鎌倉の翠川家別邸へ引揚げました。

「お兄様、大變な事が起つたワ。」

「聞いたよ、綾子さんのお家の爺やさんの事だらう。」

水泳の練習から歸つて來た健一は、よく陽に焦けた、素晴らしい身體に、大急ぎで浴衣を引つけてヴェランダに出て來ました。

「それもあるけれど、もつともつと大變な事なの。綾子さんから、お父様——立花博士——のお仕事……平泉館發掘の事を詳しく聞かして戴かうと思ふの。」

「大變な事になつたネ。」



健一と耀子と綾子は、葛を這はせたヴェランダの涼風に吹かれながら、籐の椅子を近々と寄せました。

『——知つていらつしやるでせう、お父様（立花博士）は、詐欺師だの、泥棒だのと  
言はれて、未決に收監中亡くなつたけれど、決してそんな事をなさる方ぢやないの。  
あれは運が悪かつたのと、誰とも知れない、悪い人にだまされたんだワ。』

綾子は心せはしく語り始めました。

その話といふのはかうでした。——綾子の父の立花博士は有名な學者で、特に平泉の史跡に興味を持つて調べてゐるうち、大變な事を發見してしまつたのです。

鎮守府將軍藤原清衡が、奥州の豊田館から平泉に館を築いて移つたのは堀河天皇の御宇で、今から凡そ八百四五十年前、それから基衡、秀衡、泰衡と四代、平泉館に任んで、奥州一圓に號令してゐたのでした。

その間に戦争があつたり牛若丸が秀衡を訪ねて來たり、いろいろの事件がありましたが、兎に角、一時平泉は鎌倉にも劣らぬ繁昌で、藤原一家の勢力は、清盛や頼朝でもどうすることも出来ない有様だつたこともあります。

平泉館一名奥御館の外に清衡の築いた柳の御所、秀衡のゐた伽羅の御所、後に義經が頼朝に追はれて入つた高館などの大建築があり、外に家の子郎黨の屋敷が軒を並べ、西方には中尊寺、光堂（これは今でも残つてをります）、南方には毛越寺などの巨刹があり、堂塔十、坊舎千といふ、今から想像もつかぬ繁昌でしたが、義經をかくまつた爲に、頼朝の怒を買ひ、文治五年（今から凡そ七百五十餘年前）天下の軍勢を引受けて戦ひ敗れ、兵火の爲に、殆ど残るところなく焼かれてしまつたのでした。

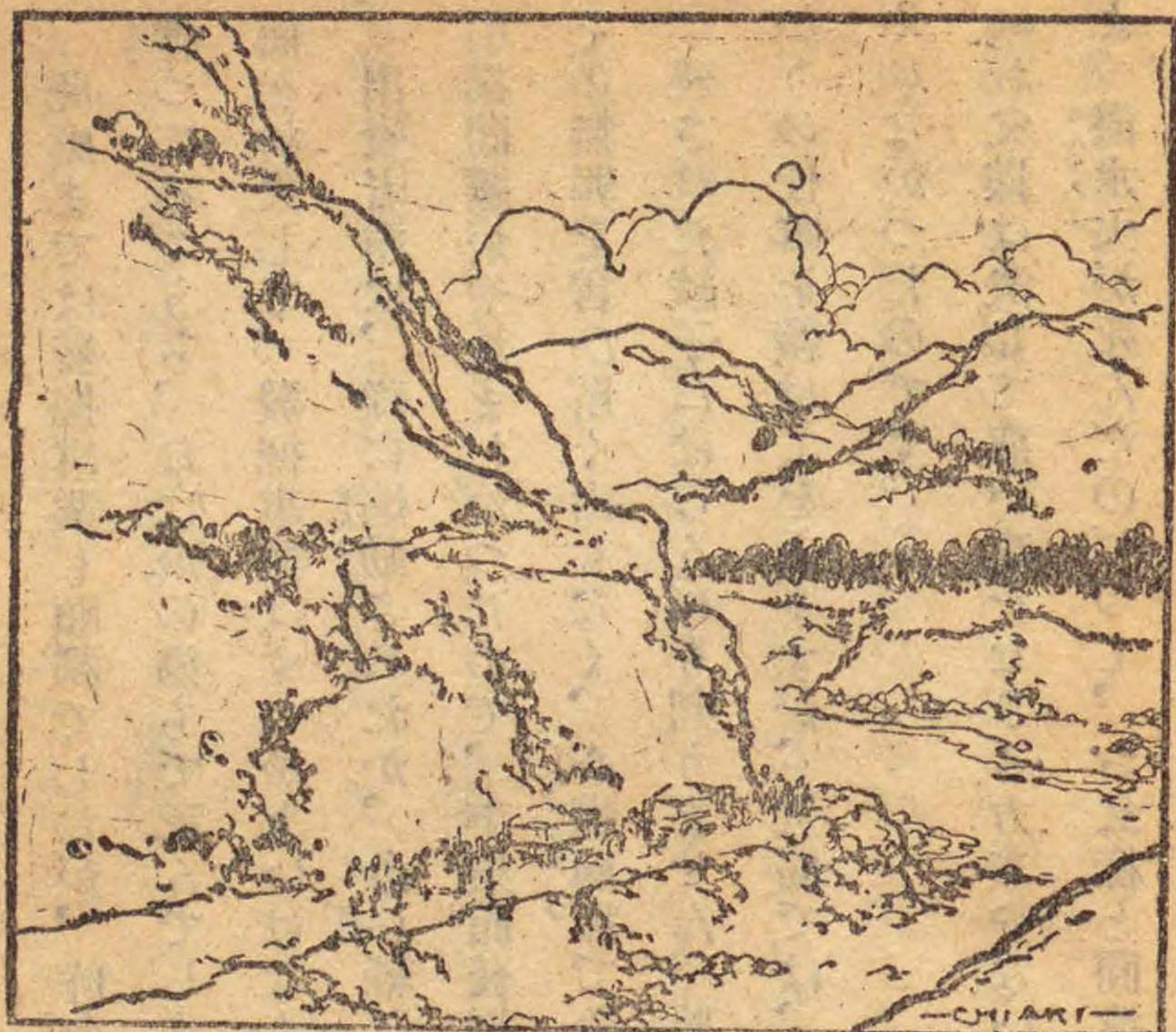
これだけは誰でも知つてゐる事ですが、立花博士の調によると、藤原秀衡は一代の英傑で、子孫萬一の爲に、夥しい金銀財寶、古美術品を、平泉館の地下に埋めたといふのです。



ところが、その後、平泉の東方を流れてゐた北上川の流域が變つて、西の方に迂回し、平泉館、柳の御所、伽羅の御所、並に高館の一部——藤原四代の榮華の、最も重要な地點の上を流れ、これ等の古跡の大部分は、北上川の流の底になつてしまつたのでした。これは決して捨事ではありません。詳しい事は平泉の古圖と今の地圖とを比べて見ればよく判ります。

立花博士は利慾などを眼中に置く人ではありませんが、高館（一名判官館）の南、今は猫間ヶ淵に沈んでゐると思はれる、水中の大密室を開くことが出来れば、歴史上非常に有益な参考品が得られるといふ見込で、一生懸命發掘計畫を進めてをりましたが、何分學者の悲しさ、仕事をする資力が續かなかつた爲に知合の實業家、唐崎莊之介にその事を話して見たのでした。

奥州は有名な金の産地で、金華山を領地にしてゐた藤原家には、どれだけの富があつたか、想像も出来ない。平泉館の密室には砂金、延金、海鼠、金塊などが山の如く



隠してあるだらう——と聞いて、唐崎莊之介は大乗氣になりました。早速自分も資本の一部を出し、廣く世の中から資金も募集して、いよいよ仕事に着手したのは今年の春でした。

幸ひ歴史學者なる立花博士は、平泉の古記録を手に入れ、それによつて仕事を進めるうち、昔の柳の御所の跡から、薄い銅板を一枚掘り出しました。鑑定の結果、それは秀衡が寶庫の所在を、工匠に命じて彫らせたもので、大部分は腐蝕してをりますが、心得のある者が見れば、



十分役に立つ繪圖面だったのです。

此處までは發掘事業も順調でしたが、昨年の秋になつて、潜水夫が猫間ヶ淵の底を捜つてゐるうち、なにかの過ちで死んでしまひ、同時に、折角手に入れた銅板の繪圖面を紛失して、發掘事業はすつかりいけなくなつてしまつたのでした。

出資者達は、誰に煽動されたか、急に騒ぎ始めました。丁度その頃、沈没船の金貨引揚問題がやかましかつたので、平泉館發掘も詐欺の告訴を受け、代表者立花博士はその無罪を言ひ解く由もなく、心臓麻痺で急死したのです。

残された綾子にはなんにも判りません。助手の瀧山は、記録だけを保管して、形ばかりの仕事が続けてをりますが、世間では、詐欺師扱にして、もう誰も相手にしてはくれなかつたのです。

「お父様は決して悪い事をなさる方ぢやないワ、きつと、なにか大きな間違があるのよ。潜水夫が死んだのだつて、お父様と間違へられて殺された——つて言ふ人があつ

た位ですもの。」

綾子がかう結びました。言ひたい事は澤山ありますが、十四になつたばかりの綾子には、それ以上の事は判らなかつたのでした。

でも、思ひ込んだ大きな眼、堅く結んだ可愛らしい唇には、命を投げ出しても父の汚名を雪ぎ、忠實な爺やの仇を討つてやらう、と雄々しくも心を定めたのがよく判ります。

「お兄様、どう？ 私、きつと悪者がいろんな細工をしてゐるに相違ないと思ふの。

唐崎といふ人の様子もをかしかつたわ。」

と耀子。

「爺やも時々言つてゐたワ——唐崎さんはこの仕事に關係がなくなつた筈だ、お父様が學者としてしてゐた事を、あんまり儲けづくで運ぶから、お父様は我慢がならなくなつて、無理なお金を出して、唐崎さんの分は返してその受取も取つた筈だ——つて」



『まア』

綾子はえらい事を思ひ出しました。

『それから爺やはまだいろいろの事を知つてゐるやうな様子だったワ。時々言ひたさうにしてゐたけれど、——ブルブルブルこれを言つちや命が危い、——さう言つて冗談だんみたいにに首を振つてゐたワ。』

健一と耀子は、何やら、恐しい物に直面したやうな気がしました。

『何もかも怪しい事ばかりよ、お兄様、——昨夜奥さんと一緒に映畫へ行つたといふ助手の瀧山さんの隠かくしには、同じ映畫館のプログラムが二冊あつたのよ。』

耀子までが妙な事を言ひます。

『そんなところを調べたのかい。——奥さんと二人分のだらう。』  
と健一。

『だつて奥さんのハンドバッグにも一冊同じものが挟はさんであるんですもの、二人で三

冊はをかしいでせう。』

『誰か伴つれがあつたらう。』

『それも聞いたのよ。——すると、瀧山さんは變な顔をして、確かにたつた二人つきりだつて言ふのよ。そして、往ゆきにも歸かへにも映畫館でも、誰にも逢はなかつたつて。』

『……………』

『それから、瀧山さんの背廣の袖口そでぐちが、少し強い酸類さんるいで焼けてゐたのはどうしたわけでせう?』

耀子の言ふことは益々不思議です。

『耀ちゃん、瀧山を疑つてゐるんだらう。——警察でもいちおう疑つて、金庫の鍵を持つてゐて、自由に開けられる瀧山を疑ふ理由はないと思つて、許したんぢやないか。』

『さうらしいワ。でも——、をかしいワ。』



三人は夕闇の中に顔を見合はせました。

『誰だッ。』

不意に健一は立ち上りました。

バタバタと芝生を横ぎつて逃げ行く人影。

『うつかりした事は言へない。僕達は見張られてゐるんだ。』

健一は妹と綾子をうながして、二階の自分の部屋へ入りました。

『耀ちやん、三枚のプログラムの事を、もう一度話してくれない？ 助手の瀧山が奥

さんの外に、もう一人映畫館へ連れて行つたといふ意味かい。』

健一は改めて訊ねました。妹の耀子の頭が、恐しく明瞭で、どんな大人も及ばないほどの直觀力を持つてゐることを知つてゐたのです。

『伴があつたのを隠してゐるのか、でなければ、瀧山さんは奥さんと一緒に映畫館へ

入つて、奥さんの中に置いて、自分だけ、外へ出てなんか用事をして、それからもう一度映畫館へ引返して、奥さんと一緒に歸つたのではあるまいかと思ふの。』

『フム、それはどういふわけだ。』

と健一。

『映畫館では切符を買つて入ると必ず入口でプログラムをくれるでせう。瀧山さんが二度映畫館へ入つたと考へると、二人で三冊のプログラムも不思議でなくなるワ。』

『面白いな。——瀧山は途中で一人映畫館を出て、そつと牛込へ引返して、爺やさんを刺して金庫を破つたといふのかい。』

『さうは言はないワ。でも、出來ない事はないでせう。映畫館はツイ近所の神樂坂の  
だし。』

耀子の頭の、不思議な働きに、健一も暫くはうなつてをります。

『でも、映畫館の入口で、間違つて二冊一緒にプロを渡すこともあるだらう。』



と健一。

『それはあるワ。でも、瀧山さんのポケットのは、一冊々々別々に二つ折になつてゐてよ。』

『二冊一度に貰つたのを一冊だけ讀んで、別々に押し込んだのだらう？』

『そんな事ないワ。上になつたプログラムは頁の切れてないのがあるんですもの。』

『……………』

健一はすつかり降参してしまひました。が、それだけではまだ、瀧山を人殺しにするわけに行きません。

『警官へそれを言つたかえ。』

『言へないワ、そんな事。でも、瀧山さんがなんか悪い事したら言ふかも知れないワ。——それに背廣の袖口の酸だつてするぶん變でせう。』

燿子の疑はなかなか根強いものでした。

『それも、映館畫から歸つて、金庫が破壊されてゐるので、驚いて上の穴から手を入れたといふ辯解もあるだらう。』

と健一。

『あら、お兄様は辯護士見たいね。』

『燿ちゃんは検事だらう。ハツハツハツハハ』

『でも、それは辯解よ。一應疑はれても仕方がないと思ふワ。瀧山さんは金庫の鍵を持つてゐるんだから、上の穴から手なんか入れなくたつて、扉を開けて中を見られるぢやありませんか。』

『でも、中にある平泉館の記録は、何時でも瀧山が見られるもので、爺やさんを殺してとる必要はないだらう。』

健一は最後の切札を出しました。

『多分、平泉館の記録といふのは、初のうちは大事だつたけれど、今ではもう秘密で



もないんだワ。——瀧山さんも、唐崎といふ人も自由に見られるのでせう。』  
燦子はまた新しい説を打てました。

『……………』

『だから、その記録なんかどうでもよくて、本當はなくなつた銅板の方が大事なんぢやありませんか。銅板がなくなると發掘が駄目になつた位だから——』

『……………』

『爺やさんを殺した疑を受けない爲に、ワザと金庫を破つて、そのあまり大事でない記録を隠すか焼くかしたんぢやないでせうか——』

なんといふ明智、健一も綾子も、今更ながら燦子の逞しい智慧に驚いてしまひました。

『それぢや行つて見よう、牛込の綾子さんの家をもう一度捜したら——』

『駄目よ、お兄様、長州風呂の中に、日本紙を焼いた灰が澤山あつたワ。綴目の形ま

で少し残つてゐるやうに思つたけれど、刑事さんが信用してくれるかどうか判らないから黙つてゐたんですもの。』

二人はもう一度うならなければならなかつたのでした。何處まで氣の付く燦子だか判りません。

『で、燦ちゃん、瀧山が爺やさんを刺したと思つてゐるのかえ。』  
と健一。

『そんな事判らないワ。誰かが瀧山さんを疑はせるやうに仕向けてゐるかも知れないぢやありませんか。——唐崎といふ人だつて随分變よ、あの人は爺やさんを邪魔にしてゐたんだし。』

『ぢや、これからどうしたものだらう、燦ちゃん。』

水泳では『日本の誇』と言はれる大選手ですが、こんな智慧にかけては、健一少年もまるで妹に齒が立ちません。



「なくなつた記録は大したものではないし、爺やさんを刺した人もなかなか判りさうもないとしたら、思ひ切つて平泉へ行つて見た方がよくはないかしら。ね、お兄様、一週間はかりお暇はありません。」

「ある、丁度練習も済んだし、日本アルプスへでも行かうと思つてゐた時だ、平泉へ行かう。燿ちやん、綾子さんも。」

冒険好きな健一はすつかり有頂天になります。

「さうませう。その銅板を捜して、殺された潜水夫の事を調べて、私達の手で平泉館の寶庫を見つける方が面白いワ。でも随分危い事があるかも知れないけれど——」

「少し位の危険は何處にでもあるよ。——第一、平泉館の寶庫を發見すると、綾子さんのお父様の汚名も雪がれる譯だ。」

「行きませう綾子さん。」

燿子に手を取られると、綾子は何時の間にやら、涙を流してをりました。

黙つて見上げた眼には、燿子の智慧と、健一の義侠心に對する感歎の光がみなざります。

平泉へ——、平泉へ——、そこには一體、何が三人の少年少女を待つてゐるでせう。

「綾子さん、あの人知らない？」

「知らないワ、どうして？」

燿子は洗面所の前に立つて、半分開いた扉から、二等車のハイカラな青年を指さしました。蜻蛉の眼のやうな頭、赤いネクタイ、荒い縞の背廣、長い顎、蒼白い顔色、——なんと、いふ不愉快な人相でせう。

同じ車の中にある健一——詰襟の學生服を着て、淺黒い顔をした、明朗そのもののやうなのと比べると、まるつきり別な人種のやうに見える青年でした。



『それがどうしたの燿子さん。』

『をかした事があるの、綾子さんの鞆を覗いたり、ハンドバッグを調べたり。』

『まア。』

『お兄様は呑氣だから、そんな事を少しも知らずに、水泳の話なんかしかかけられると、夢中なんですよ。』

『どうしませう、怖いわ、私。』

『大丈夫よ、私に任せていらつしやい、——もう仙臺でせう。』

『ええ。』

列車は間もなく仙臺の停車場に着きました。停車時間は十分、物賣の聲や、乗降の客にしばらく賑はひましたが、やがて發車用意のベルが鳴ると、プラットホームに降りてゐた客は、先を争つて車の中へ歸ります。

『サア、降りませう、お兄様。』

燿子は不意に網棚から荷物を取りおろしました。

『平泉はまだだぜ、燿ちゃん。』

『でもここで降りて大事な大事な秘密の用事をかたづけろ筈だったア、お兄様は忘れてらつしやるのよ、ね綾子さん。』

『……………』

『待て待て二人で勝手に降りちや困るな。』

健一は大あわてにあわてて、両手に鞆を下げると、動き出しかけた二等車から飛降りました。

『おや？』

後に残されたハイカラ青年の驚きは鞆物です。これも大急ぎで手廻りの荷物をまよめると、帽子を阿彌陀にかぶつて、靴をブラ下げて、鞆を抱へて、

『危い危い、飛降りちやいけないッ』



車掌の止めるのもきかずに、動き出した車からプラットホームに飛び降りました。尻餅を一つ突いて、轉げ出した帽子を拾つて改札口の方へ行くと、ツイ今し方降りたばかりの、綾子、耀子、健一の一行は、影も形も見えません。

『おや。』

ひどく面喰つた青年は、念の爲に振り返ると——なんと、今しがた滑り出した列車の、自分達の乗つてゐた次の三等車の窓から、三つの首が重なり合つて此方を見てゐるのです。

『左様なら。』

大茶目の耀子は、鼻の先で指を振りました。『悲しみの塑像』の綾子も、この時ばかりはたまらなくなつて噴出しました。正直者の健一だけは、まだ、二等車から引摺るやうに降されて、すぐ隣の三等車に乗せられた理由が呑込めならしく、いとも不思議さうにこのプラットホームの小喜劇を見てゐるのでした。

『あんな事をしてもいいのかしら耀子さん、少し可哀さうね。』

と綾子。

『だつて降りるのは向ふの勝手ぢやないの、私はをかしくつて、をかしくつて——』  
耀子はただもう笑ひ轉げてをります。

父博士の遺した大事業を繼續して

『あ、お嬢様。』

『花井さん、電報を御覽になつて?』

『え、潜水夫のお神さんと二人で、すつかり小屋をかたづけしておきましたよ。』

書生の花井一郎は、綾子から鞆を受取つて、雇つておいた自動車に乗せました。

『三人泊れるかしら。』



『去年まで七人も泊つてゐましたよ。』

立花博士に信用されて、平泉館發掘の事務所を預つてゐるだけに、花井一郎は若いにしては、なんとなく頼もしい男でした。

『なんか變つた事はない？』

『なんにもありませんよ。北上川の堤防はそのままだし、銅板の繪圖面は相變らずどこへ行つたかわからないし、——仕方がないからお高さんと二人で、仕事を始めるのを待つてゐるんです。——僕はいつまでここにゐても驚きませんよ。退屈なんかするものですか、勉強にはこんなよい場所はないですからね。』

花井はこんな事を言つてをります。來年あたり專檢の試験を取るんだと言つてゐる花井には、こんなよい勉強場所はなかつたでせう。

間もなく一同は、判官館の下、木立の中に隠れん坊をするやうに建てた、發掘事務所の小屋に着きました。

『まア、まア、お嬢様。』

さう言つて迎へてくれた中年の婦人は、昨年猫間ヶ淵で死んだ潜水夫の配偶で、お高さんといふ——、白い割烹着に、引詰めた東髪といった、思ひのほか東京風の女です。

小屋は板敷の六疊ほどの二つ、それに小さい物置がついてゐるだけ、不自由といへば不自由ですが、夏だけ十日や二十日だったら、キャンプのつもりで五人や七人暮せないことはありません。

『まアするぶん大變ね、こんなに川底が見えて。』

小屋を出て、北上川の岸へ降りると、さすがに、この一、二年來の、父立花博士の苦心が思ひやられます。昔の平泉館の秘密を探る爲に、北上川に大堤防を築いて、昔の櫻川の流域に流しこみ、水のなくなつた河床を縦横に掘下げてゐるのです。

『綾子さんのお父様は、大變な仕事を始めたんだね。』



健一も、この大工事の跡を見ると、さすがに舌をまきます。

『でも、花井さん達が番をして、後を荒さないやうにしてゐてくれたから、すぐにでも仕事が續けられるぢやありませんか、費用はお父様が出して下さるさうだから、大急ぎで人夫を集めて、發掘の仕事を始めませうよ。——花井さんは指圖が出来るでせう。』

燿子は相變らず頭の上を發揮して、グングン物事を運びます。健一、燿子の父で大實業家の翠川氏みどりかわが後援してくれば、この仕事は思ひの外順調に進むでせう。

『出来るつもりです。今までも大抵僕がやつたんですから。』

『丁度よかつたわねえ。』

綾子も父博士の仕事の繼續が出来て本當に嬉しさうです。

急に人夫は集められ、堤防ていぼうは新たに築き足たされて、平泉館の發掘事業が續けられま

した。

大勢の人夫を指揮するのは、書生の花井一郎、炊事萬端すゐじばんたんの世話はお高さん。

健一は位ばかりの總監督で、間まがな隙すきがな、北上川の淵へ飛込んでは泳いだり、早瀬をあさつて鮎あゆや鰻うなぎや鮪はちを取つてゐるのですから、これは全く當になりません。

青葉山と碧玉へきぎよくを湛たへたやうな水の間を、世にも可愛らしい二人の少女、綾子と燿子が飛廻るのが、どんなに人夫達の眼や心を慰めたこととせう。どちらも白やピンクの軽やかな洋装で、一人は蝶々のやうに輕快に、一人は姫百合のやうに靜かに、むづかしい發掘事業を見て廻つてゐるのでした。

『あの仙臺でまいたハイカラさんが來てゐるのよ、三日も前から——』  
或日、燿子はそつと綾子に囁きました。

『まあ。』

燿子はたまらなささうに笑ひ出しますが、心配しんぱい性な綾子は、なんとなく不吉ふきちな豫感



にぞつとしてをります。

その晩、花井一郎は少し気分を悪くして、青い顔をしてをります。多分一日陽に照らされて、人夫に號令をかけてゐたからでせう。

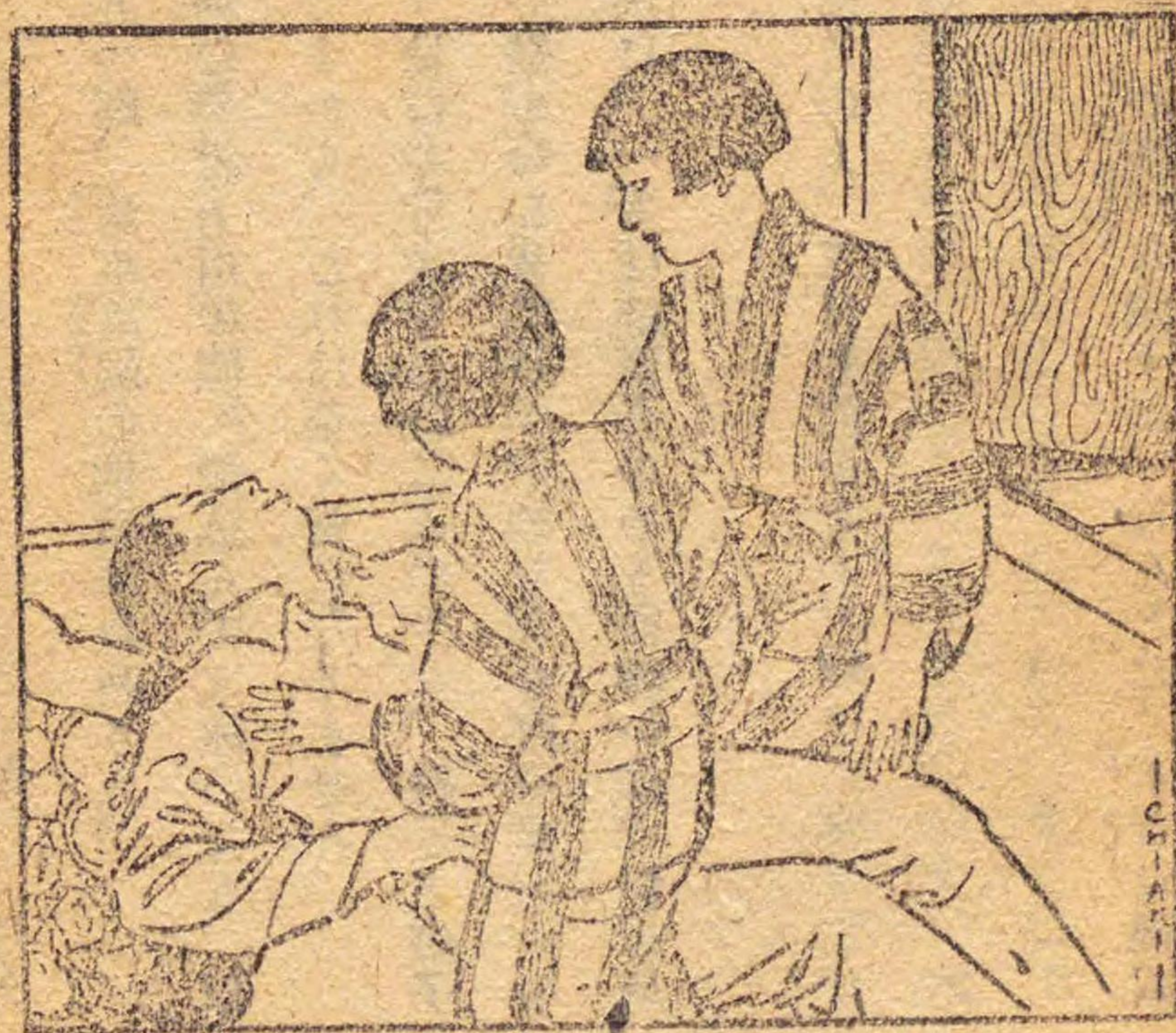
『物置で寝るのは悪いよ。あすこは窓が小さいし、扉を開けると用心が悪いし。』

健一はそんな事を言ひます。

『大丈夫ですよ、慣れてますから。』

『いや、君が病氣になると大變だ。僕は總監督といつても名前ばかりだから。』

健一は無理に花井一郎を六疊の自分の



寢臺に寝かして、自分は物置の筵ひしの上に行きました。

その晩のことでした。

『少し變ぢやない？ 燦子さん。』

夜中に、綾子は側に寝てゐる燦子せんこをゆり起しました。

『どうして？ 綾子さん。』

『なんか唸うなつてゐるやうよ』

『さうね。』

二人は寢卷のまま床の上に降りると、手提電燈てきでんとうを持って、隣の部屋の方へ行きました。唸る聲はそこから聞えるのです。

『花井さん。』

兄健一の寢臺に、今晚に限つて、花井が寝てゐる筈なのです。

『少し變ね、花井さんが御病氣が悪いんぢやないかしら。』



二人は顔を見合はせると、思ひ切つて扉を押開けました。二條の手提電燈の光に照らされて、

『あッ。』

床の上には夥しい血汐、その上に花井一郎が倒れてゐるのです。

騒は急に大きくなりました。健一もお高さんも、人夫頭も飛んで來ました。

抱き起して見ると、花井は肩先と両手にひどい傷を受けて、蟲の息になつてゐるのです。電話をかけたなり、人を走らせたり、村の醫者が來たり、小屋の中は煮えくり返るやうな騒でしたが、曉方までに、自動車で一關病院に運んで、『命だけは取止める』と聞いて、どうやらかうやらホツとしました。

花井がゐなくなると、發掘作業は行き詰りですが、今となつては中止するわけにも行きません。お高さんは花井の附添で一關へ行つたので、炊事の監督は綾子、花井がやつてゐた人夫の號令は、健一か引受けてやるより外はなかつたのでした。

『花井のかはりに僕がやられた方がよいくらゐるものさ。弱つたね。』

仕事に馴れない健一はこぼし抜いてをります。

『でも、お兄様の方が大將だと思はれたんだワ。悪者はあの晩寢室が變つたことを知らずに、お兄様を刺すつもりで來たんだから。』

耀子は相變らず物の底の底まで見透してをります。

『困つた。人夫は皆引揚げてしまつた。』

『えッ。』

『河原は人ツ子一人ゐない。』

『どうしたの、お兄様。』

『人夫へ悪い事を吹込んだ奴があるんだ。——こんな事を綾子さんに聞かせるな。』  
『どんな事を、お兄様。』



健一と燿子は、木下閣このしたやみから、眞夏の陽に照らされて、乾ききつた肌はだを見せてゐる河床を見ながら、ひそひそと話してゐました。

『立花博士は大詐欺師で、刑務所で死んだ。こんな仕事に首を突つ込んでゐると、日當にはなるだらうが、そのかはりいつ警官が来てみんな縛るかもわからない——つて言つた奴があるんだ。人夫の半分以上は土地の正直な人達だから、驚いて引揚げてしまつたんだよ。賃金を倍にするとやつても駄目だ。』

『お兄様。』

『僕はもういやになつたよ。』

『お兄様そんな事では駄目よ、東京へ電報を打つて、百人も人夫を呼ぶんだワ。』

『そんな事が出来るかい。』

『出来ずとも、三日経たないうちに来るワ。東京は人が餘つて困つてゐると言ふぢやないの。』

燿子は大變な事を言ひ出しました。日本の誇と言はれる大選手も、頭のよさではどうしても妹にはかなひません。

『どうしたんでせう。人夫が一人もゐないのは？』

間もなく綾子が氣がつかしましたが、燿子は——東京の人夫を呼ぶことにしたから、——と當らずあた觸らすさわの事を言つて、綾子をなだめておきました。

『だが、かうして待つてゐるのは馬鹿々々しいなア。二日でも三日でも眞剣に仕事を經驗すると、ジツとしてゐては、罰はちが當るあたやうな氣がする。』

健一はフラリと河原へ出て行きましたが、三十分ばかりすると、汗だくになつて飛んで來ました。

『た、大變。』

『どうしたのお兄様。』

『み、水を一杯。』



綾子が汲んで出すコップを一息に呑み干すと、

「高館の跡の河床の崖になつたところに鼠の穴のやうに横穴があつたんだ。念の爲に鶴嘴で二つ三つ叩くと、ポコリと大穴が開いたんだ。」

「えッ。」

「覗いて見ると立派な隧道だよ。中は石で壘み上げてある。寶庫の入口かも知れないと思つたから、大急ぎに穴をふさいで歸つて來たんだ。何しろ、四方は見通しだし、この明るさだらう。」

健一が驚いたのも全く無理はありません。

「お兄様、行つて見ませうか。」

「待て待て、どうせ人夫は一人もゐないから、そつとしておけば誰も氣がつく筈はない。晩まであのままにして、暗くなつたら出かけよう。」

今度はかりは健一の方が利口でした。

### 人の足跡と銅板の繪圖面

その晩九時頃、健一と耀子と綾子は、北極探検ほどの用意を整へて、高館の下の河床に降りて行きました。

「お兄様、悪い道ね。——それに月はないし。」

耀子と綾子は、何べんか轉げました。堤防を築いて、無理に水を乾した川の中を歩くのですから、大小の岩石が邪魔をして、なかなか思ふやうに進みません。

「懐中電燈を點けようか。」

「そんな事したら、どこまでも見えるぢやありませんか。」

耀子にたしなめられながら、それでもどうやらかうやら、晝のうちに見定めておいた穴の入口までたどり着きました。



『ここだ。少し待て、入れるやうにするから。』

健一は石の間へ隠しておいた鶴嘴つるはしを持出すと、力任せちからまかに叩き込みました。

二打、三打、穴は次第にひろがつて、少しこごみさへすれば樂に入れるほどの入口が闇の中に見えました。

『さア入るぞ、有毒ガスがあるかも知れないから、穴の中へ入ったら蠟燭をつけよう。』

健一はこんな事には馴れてをりました。持つて來た二メートルほどの棒の先へ蠟燭を點けた。それを前へ突出すやうにして進むのです。

道は少しづつ、爪先つまさき上りになつてゐますが、隧道さんねるは泥磐岩でいはんがんをくり抜いたもので、思ひのほか完全な上、足の下は、水垢みずあかこそ溜たまつてをりますが、八百年前に造つたままの見事な石疊、なんの不安もありません。

石疊を敷いたのはたつた一筋で、それを辿たどつて行くと、今度は少しづつ上りになつ

て、やがて十メートル四方ほどの廣間ひろ間になりました。

『おや？』

燿子は頓狂どんきやうな聲をあげます。

『どうしたの燿ちゃん。』

『人の足跡よ。』

『えッ。』

懐中電燈が二つに蠟燭が一つ。

粗末そまつと言つても、かなり手際てぎはよく敷いた石疊の上には、場所によつては三纏も四纏も水垢が溜つてをりますが、その上に二つ三つ五つ——いや、もつともつと澤山、まぎれもない人間の足跡がはつきり印しるしされてゐるのです。

『藤原時代の人間の足跡だらう。』

運動家らしい健一は、忽ち物を樂天的に考へますが、燿子と綾子はそれほど呑氣で



はありません。

『でも、踵の跡に鋌を打つてゐるワよ。八百年も前の人が、こんな靴を履いたかしら。』

『フーム。』

健一は唸り出しました。靴を履いた人間がここへ入つたとすると、これは大變なことにあります。

『お兄様、晝見た時、穴の入口はどんなになつてゐて？』

『砂利と岩と泥でふさがつてゐたよ。』

『八百年も前から水底で塞がつてゐたのに、お兄様が鶴嘴でそんなにわけもなく開けられるかしら。』

『さう言へばさうだな。』

『この穴は寶庫とは關係のない昔の抜穴ぢやないかしら、——綾子さんのお父様が一

度發見なすつて、なんにもなかつたんで入口を塞いでおいたのぢやないかしら？』

燿子の考へやうは次第に緻密になつて行きます。

『おや。』

今度は綾子がなんか見つけました。

『何？』

『なんでせう。ずるぶん重いワ。』

『半メートルほどの薄い銅板で、綾子の手では持ち上げるのが精一杯です。』

『あッ、寶庫の繪圖面よ、きつと。』

『どれどれ。』

三人は思はず首をあつめました。

それは地圖を毛彫りにした銅の薄板で、半分綠色に腐蝕してをりますが、決して讀



めないことはありません。

「わかつたワ。」

綾子は急に顔をあげて、四方を見廻します。

「どうしたの綾子さん。」

と耀子。

「この銅板の繪圖面は、潜水夫が殺された頃から見えなかつたんですつて。——だから、多分、かうぢやないかと思ふの、——この穴の中にまだ水のある頃、潜水夫はこの銅板の繪圖面を持つてここへ入つて来て、寶庫へ通ふ祕密の道を探してゐるうち、空気を送る管を切られて、ここで窒息して死んだんぢやないでせうか。死體は穴の入口から、繩で引上げられたけれど、銅板は潜水夫が死ぬ時落したまま、ここに残されてあつたんだワ。」

綾子の話に、耀子と健一も、思はずツツとして顔を見合せました。

「それぢや入口を塞いだのは？」

と耀子。

「きつとお父様よ。水がなくなると人に見つけられるから、それで穴を塞いで東京へ引揚げたんぢやないの。」

もう疑ふ餘地ありません。

「それぢや、その銅板を見て、寶庫へ通する祕密の地下道を捜し出さう。」

健一は蠟燭を棒から外して、綾子の持つてゐる銅板の上へ持つて行きました。この繪圖面さへあれば、八百年來の祕密は解けて、藤原家の榮華の形見なる、金銀財寶も手に入り、詐欺師にされて死んだ立花博士の汚名も雪がれるでせう。

「おや、變だね。」

健一はフト四方を見ました。風もないのに、手に持った蠟燭の灯がユラユラと揺いでゐるのです。



『あの音はなんでせう。』

綾子は聴耳ききみみを立てました。なんとも知れない恐しい音が、地響を打たせて迫せまつて来るのです。

『堤防が切れたかも知れないワ。大急ぎで外へ出ませう。』

と耀子は敏感に事情を呑込みます。

『よしッ、銅板は俺が持つ。』

健一は大事な繪圖面を小脇こわきに、綾子と耀子の手を取るやうに駆け出しました。

いや、駆け出さうとしたのですが、十メートル四方ほどの廣間ひろまを出て、外へ出る隧道ぬいどへかからうとして立ちすくんでしまったのです。

『あッ。』

想像も出来ないやうな恐しい水が、穴の入口から奔流ほんりゅうのやうに、隧道一パイに流れ込んでゐるのです。

この凄まじい水の奔注する隧道を、逆に泳いで行くことは、世界一の水泳の名人でも出来るはずはありません。おまけに水は隧道一ぱいに溢れて、首を出す隙間もない上、隧道の長さは三十メートル以上もあるのです。

その内に、水は次第に地下の廣間ひろまを浸して、三人の立つてゐる足元へ蠶食さんじよくして來ます。

『どうしませう。お兄様。』

耀子はさすがに蒼くなりました。

『繪圖面を見て、寶庫へ行く道を搜したら。』

こんな時は、内氣な綾子の方が落ちつきます。しかし懐中電燈と蠟燭を持って行つて、銅板の繪圖面と首つ引をしたところで、咄嗟とつさの間に寶庫への秘密の地下道が見つかりさうありません。

『おや、水が増えないのはどうしたことせう。』



耀子は漸く冷靜になりました。あわててゐるさへしなれば、この少女の優れた頭は、まるのこぎり圓鋸のやうに難關を切り開いてくれるでせう。

『さう言へば、ここへは水が来さうもないね。』  
と健一。

『隧道の入口からは、元の通り入つてゐるのでせう。きつとどこかへ水が抜けるんだ  
ワ。』

耀子は懐中電燈を振り照らして、足元の水の中に二、三步降りて行きました。

『お兄様、大きな岐道があつてよ。』

『どれどれ。』

健一も綾子も水の中へ入つて行きました。耀子の指さす方を見ると、恐しい勢で隧道の入口から入つて来る水の大量が、ホール廣間の前で一度淀んで、えだみち右手の大きい岐道へ靜かに靜かに流れて行つてゐるのです。

『行つて見ようか。』

もう躊躇などはしてをられません。隧道を入つて来る水の勢は少しも衰へる様子はなく、廣間の廣さには限りがあるし、八百年來淀んだ空氣は、三人の人間をいれて、次第々々に濁つて行くのが、いきぐる愚苦しくなる胸にも、弱つて行く蠟燭の灯にもよくわかるのです。

『お兄様、行きますせう。』

そこから二十メートルばかりは、かなり激しい水勢に押し流されるやうに、三人は胸まで浸つて進みました。健一は銅板を頭の上に載せて、片手に高々と蠟燭をかかげ、懐中電燈を振りかざした綾子が、それに續き、一番最後は耀子が、これも懐中電燈を持って、おぼつか覺束ない足搜りに進みました。

『石があるぞ、——左は深いぞ。』

健一は時々さう言ひました。



巾の歩みのやうに、又十メートルばかり。

『あッ。』

健一は思はず足を踏み滑らして、水の中に倒れました。急に深くなつたのです。水泳の名選手はすぐ起上りましたが、蠟燭はどこかへ流されてしまつた様子です。

『お兄様、背が立たないワ。』

『泳いで来い。』

綾子も燿子も少しは泳ぎますが、靴をはいて着物を着てゐる上に、懐中電燈を濡らすまいと思ふと大骨折です。

『あッ。』

激しい大きい波、——急に隧道の入口でも崩れたのでせう、あつと言ふ間に二少女は水に吞まれて、懐中電燈を取落してしまひました。

四方は塗りつぶしたやうな闇。

『どうした、綾子さん、燿ちゃん。』

健一は大聲でどなりました。

『ここよ、お兄様。』

『私はここよ。』

幸ひ綾子も燿子も浅いところへはひ上つた様子ですが、蠟燭も懐中電燈も取り落ちて、鼻をつままれてもわからない闇です。左右はくり抜いた岩、前も後も水、——その水勢が、隧道の口が大きくなつたと見えて、次第に激しくなるばかりです。

『お兄様。』

『綾子さん。』

『燿ちゃん。』

三人は探りよつて、闇の中に手を繋ぎました。

その時、北上川の堤防の上には、雲間をもれた月の光に照らされながら、せつせと



堤防を壊して、いやが上にも隧道の口へ水を落し込んでゐる者があります。

健一、綾子、燿子はどうしたら助かるでせう。

水の中に射す青白い微光

『しつかりしろ、燿ちゃん、綾子さん。』

二人の少女を両腕に援けて、胸まで浸す奔流の中に、翠川健一少年は必死の奮闘を續けました。

『お兄様、どうなるんでせう。』

日頃一番陽氣で、一番智慧の廻る燿子は、こんな羽目に陥ちると、無口で悲しさうな綾子ほどの落ちつきもありません。兄の肩に犇とすがりついて、次第に増して行く隧道の中の水嵩ばかり氣にしてをります。

『燿ちゃん、そんなに心配しちやいけない、僕がついてるぢやないか。』

健一は隆々たる肩を聳やかして、かう強く言ひ切りました。日本の選手權を幾つか持つてゐる水の大選手翠川健一は、こんな時はどんな大人物よりも頼みになる少年だったのです。

三人は激流に押され氣味に、なほ二十メートルばかり進みました。その間に幾度も足をさらはれて、水の中に横倒しになつたり、恐しく深い穴に落ちて、危く水を呑みさうになつたかわかりません。

何より困つたことは、トンネルの中の水は次第に増して、顔を出してゐるのが精一杯な上、空氣が次第に悪くなることでした。入つて来る水の勢は少しも衰へないので、すから、このまままごまごしてゐると、三十分経たないうちに、三人とも窒息するか溺れるか、とにかく命の助かりやうは無いでせう。

『もう一步も進まれない、隧道一杯の水だ。』



健一は思はずかう言つてしまひました。頭が隧道の天井につかへてゐるのに、水はもう顎を越して口に入らうとしてゐるのです。

『お兄様。』

『引返すか、別の道を探すんだ。』

健一は思ひ切りよく踵を返しました。

『そんなことは出来ないワ。』

燿子は驚いて兄の首つ玉にブラ下ります。ここまでたどり着いた艱難をもう一度くり返すのも大變ですが、それより、引返したところで、他に抜道がありさうもなかつたのです。

『でも、このままは進めないぜ。』

健一ほどの者も、隧道一杯に奔騰する水は、どうすることも出来ません。

『あれは何んでせう？——水の中にほんの少し薄明が射してゐるんぢやないでせう

か。』

燿子は健一の腕を引張つて、今まで進んでゐた行手の方の水を見せました。

『をかしいね。』

水肌へすれすれに眼を持つて行くと、行手の水の中に、薄青い光が、ほんの少しですが、ポーツと射してゐるのです。

『今晚は月があつたかしら。』

燿子はいきなり變なことをききます。

『満月は三日ばかり前だつたから、今頃は月の出る頃かも知れないア。』

『それぢや、きつと月の光よ、——ここは隧道の出口なんだワ、今まで知らずにゐたけれど、——月が出て水に射したんで、あんなに薄明るくなつたんぢやないかしら。』

燿子は漸く素晴らしい頭腦を働かせ始めました。



「僕が行つて見て来ようか。」

健一はもう潜る仕度を始めました。何メートルいや何十メートル潜るのか見當もつませんが、今はそんなことを言つてゐる場合にはありません。

「一緒に行きませうよ、お兄様。」

「危いぜ、耀ちやん、僕が瀬ぶみして歸つて来るまで、ここで待つてゐたらどう？」

「だつて、ここに長くゐられないのは判つてゐるし、お兄様一人行つて駄目な位なら、ここに残つてゐる私達だつて助かりやうは無いぢやありませんか、ね綾子さん。」

「ええ。」

それは本當に綾子の言ふ通りでした。健一一人行つて歸つて来られる位なら、三人でも行けないことはないでせうし、健一だけでも脱け出せないものなら、三人は死ぬより外に道もありません。

「よし、その氣なら一緒に行かう、出来るだけのことはやつて見るが、僕の働きを邪

魔しないやうにしてくれ、生きるも、死ぬも一緒だ。」

「お兄様。」

「耀ちやんは左から、綾子さんは右から、僕のバンドを掴むのだ、手を離してはならぬぞ、——そして出来るだけ底を潜るんだ、水は隧道の天井すれすれになつてゐるから、天井に吸ひつけられると大變だぞ。」

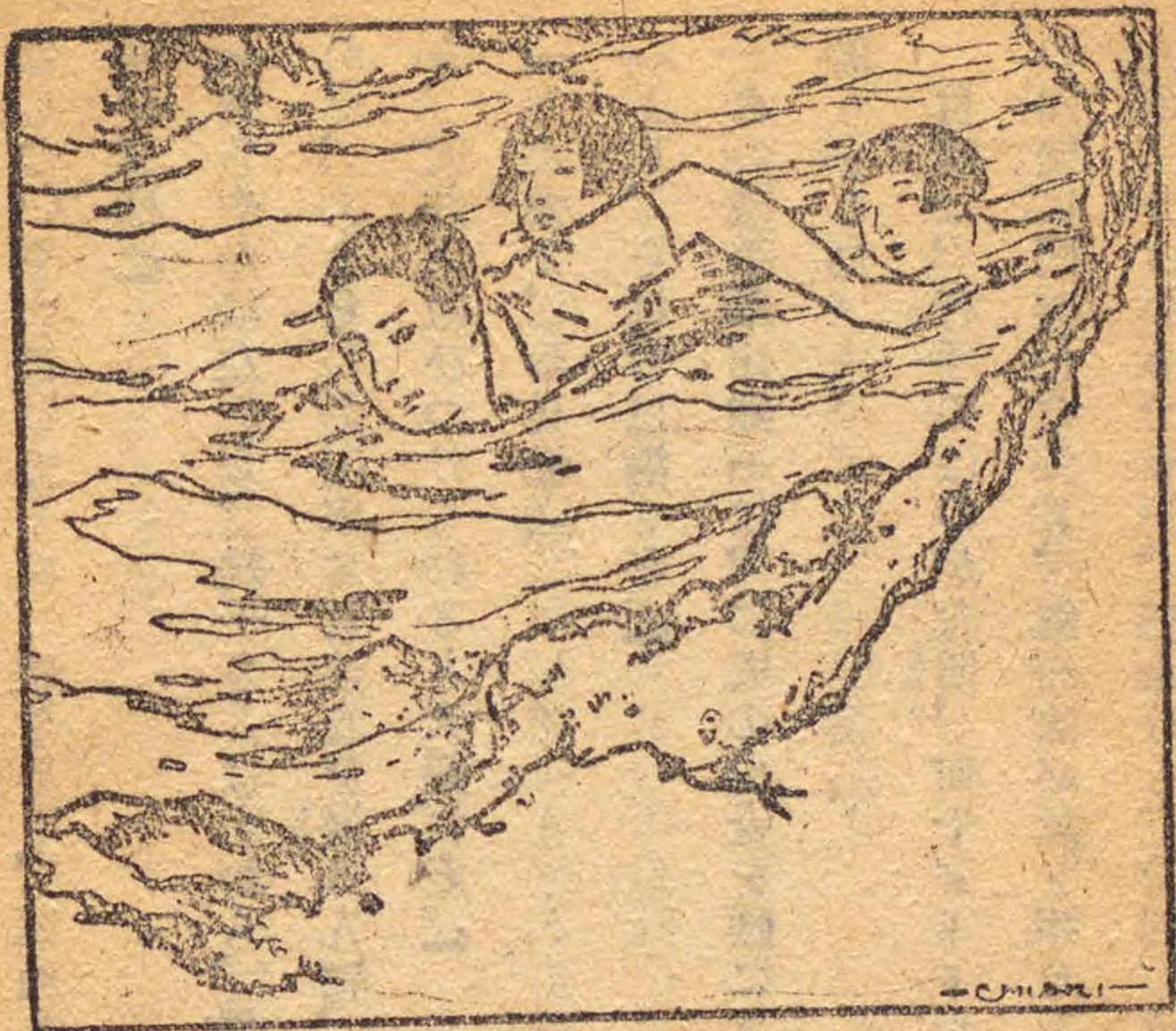
「大丈夫よ、お兄様。」

「よし、それでは潜るぞ。」

水の選手翠川健一は、二人の少女を腰にブラ下げて、渦巻く水の中に、魚のやうに潜りました。

目標は、行手のほのかな明、何十メートル先か判りませんが、岩をくり抜いた隧道の四壁に衝突しながら、健一は必死と手足を働かせて、三十分ばかり——いや實はほんの三分ばかりですが、三十分も三時間も潜つてゐるほどの苦しさを堪へて。盲滅法





に前へ、前へと進みました。

両側の二少女は少しも健一の邪魔をしません。大選手と一緒に潜つてゐられるわけは無いのですから、少しは水を呑んだのでせう。ともすれば、バンドを握んだ手が緩みますが、水の中に、三人の方向を示してくれる明は、少しも先刻より明るくなりません。

健一は最後の力がつきました、それに右の方のバンドを握んでゐた綾子は、力がつきたものか、健一にもよく判るほど水の中でもがいてをりましたが、急にバ

ンドの手を離して、スーと浮いて行きます。

危いッ——水の中で口はきけません、健一は驚いてそれを追ひました、もう最後の精力も燃し盡くして、健一ほどの者も、この上の辛抱が出来なかつたのです。

「あッ。」

健一は思はず聲をあげました。身體を浮かすと、何時の間にか顔が水の上に出て、爽かな夜の空気を胸一杯吸つてゐたのです。

丁度木立の蔭になつた月の美しさ。

健一は大急ぎで燿子を引揚げながら、片手を働かせて、泳ぎました。

幸ひ、つい側に、半死半生の綾子も浮いてをります。

「有難い。」

どうせ川の中の淵で、それから岸までは、何程の距離でもありません。健一は俵を引揚げるやうに、二人の少女を岸へ擔ぎ上げました。



耀子と綾子は、したたかに泥水を呑んで、三日ばかりは休まなければなりません。した。

健一はさすがに元氣一杯で、その間に東京から着いた人夫を督勵して、一時壊された堤防を築き直し、隧道の中から水をかい出しました。

隧道の中で取落した銅板の繪圖面は、出口の方に近く、泥の中に沈んでゐたので、幸ひ何の故障もなく健一の手に戻りました。

が、綾子と耀子が元氣にならないうちは、さすがに一人で隧道の探検も出来ません。仕方なしに、河床を掘り下げたり、隧道の入口を擴げたり、堤防を嚴重にしたり一生懸命働いてゐる人夫の作業を監督しながら、ブラブラ歩いてゐると、岸の柳の葉蔭に釣竿を垂れてゐた男が、人目を憚るやうに、そつと招いてをります。

『僕ですか。』

『え、少し話したいことがあります。まア、そこへ腰をおろして下さい、釣りながら話しますから。この邊はよく釣れますよ。』

紫外線よけの黒いロイド眼鏡をかけ、ダブダブの洋服を着て、ヘルメット帽を冠つた男は、こんな調子で始めました。

『どんなお話です、僕は貴方を知らないんですが——』

健一はすつかり用心深くなつてをりました。

『知らなくていいです、私は東京の學校に勤めてゐる者で、夏休を利用して、東北の河や湖水を釣つて歩くものですが、——實は、二、三日前の晩、この堤防をせつせと壊してゐる者の姿を見かけたんです、——君はこの工事を監督してをられるやうだから、一寸注意しておくだけのことですよ。』

『どんな人です、その堤防を壊してゐたといふのは？』

健一も固唾を呑みました。



『色の青白い、ハイカラな若い男ですよ、面長で、少し受口で、頭の毛をトンボの眼  
玉のやうに光らせた——』

『あッ、あの男ですか。』

『知つてる人ですか。』

『いえ、見たことのある人間です。』

『いづれにしても、油断はなりませんよ、貴方とあの妹さん達の身邊には、絶えず何  
かつきまとつてゐるやうですから、——いや餘計なことを言つてすみません、私は黙  
つて鱒でも釣つてゐるさへすればいいんですがね、——この邊には眞夏の暑い日の夕方  
になると鱒が浮いて來ます。尤もこんな釣竿では駄目ですがね、手網があれば捕れま  
すよ。』

釣好きらしいヘルメットの男は、そのまゝ水面の浮標の動きにジツと見入りまし  
た。まだ三十臺でせうが、日に焦けて澁紙色の皮膚、何となく知識的な物の言ひやう

など、兎に角、この邊には滅多にゐるさうもない不思議な人物です。

健一は何となく壓迫されたやうな心持で、禮を言つて歸つて來ると、綾子も燿子も  
もう起出して、お高さんを相手に晝の仕度をしてをります。

『お兄様、大變な事が出來ましたよ。』

健一の姿を見ると、燿子は飛出して來てそつと囁きました。

『何だ燿ちゃん。』

『唐崎商事の社長と秘書よ、——その秘書といふのが、仙臺でまいた變なハイカラさ  
んなの、一週間も前から、この邊をウロウロしてゐるでせう。』

『そのトンボ頭のハイカラなら、さつき變な釣の紳士が、堤防を壞したと教へてくれ  
た曲者でせう。どうかしたら、書生の花井を刺したのも、同じ人間だったかも知れま  
せん。』

健一はむつかしい談判になりさうなのを覺悟して、小屋の中の居間とも客間ともつ



かぬ六疊の戸を押し開けました。

『や、君は翠川君、待つてゐましたぞ——御存じだらうが、私は唐崎莊之介、この平泉發掘事業の投資者だ、一緒に來たのは秘書の杉山三五郎君、どうぞ宜しく。』

『……………』

健一は黙つて挨拶して、この古風な頬鬚ほひひげを持つた實業家の向ふへ、腰をおろしました。

青葉を吹く窓の風、外は海底のやうな深い緑で申し分なく爽かな小屋ですが、部屋の中は何となく鬱陶うつたうしい空氣が、古沼のやうによどんでをります。

『ところで、立花博士亡き後は、半分出資した私がこの事業の繼承者ぢや、早速引渡して貰ひたい、序ついでに、近頃手に入つたといふ、銅板の繪圖面も、當然の權利として、私が申し受けますぞ。』

唐崎莊之介は高飛車たかびしゃでした。相手を少年と見て、一舉に物事をかたづけようと思つ

たのでせう。

『私は法律上のことは知りませんが、立花博士が亡くなれば、事業は當然相續者の綾子さんが繼がれる筈です。綾子さんの後見人は、いづれそのうちにきまるでせう、——不服があつたら、どうぞ顧問辯護士とお掛合ひ下さい、そんなことで銅板もお引渡し出來ません。』

健一もなかなか負けてはゐません、水の覇者はしゃと言はれた大選手は、向息むかひいきもなかなか強かつたのです。

『そんな馬鹿なことは無い、この事業は一體誰が金を出して繼續してゐるんだ。私へ斷りなしに。』

『私の父です、——翠川健太郎です、新たに出資して、綾子さんを助けてゐるので、株式會社でも何でもないので、出資も、事業の繼續も自由な筈だと聞いてをります。』



『翠川氏が？ 何と言ふ馬鹿なことに手に出したものだ。』

唐崎莊之介はプリプリ怒りましたが、翠川健太郎は有名な實業家でもあり、それに健一の言ふことに間違が無かつたので、どうすることも出来ません。

『いづれ改めて談判に来るぞ、馬鹿々々しいにも程がある。』

『どうぞ。』

健一を尻目に秘書を促して荒々しく引揚げました。

『お兄様、銅板の繪圖面はどこ？』

『六疊の押入れにある筈だ。』

『それが無いんです。』

と燿子。

『えッ。』

健一も綾子も、一團になつて六疊へ駆け込みました。丸太を框にした窓の硝子戸は一杯に開いて、戸棚も開け放したまま、中の銅板は影も形もありません。

『やられたッ。』

健一は、いきなり開いた窓から飛降りましたが、また月の出には早い林は、塗りつぶしたやうな闇で、一寸先の見通しもつきません。

泥棒はみんなが次の間で夕飯をやつてゐる隙を狙つて、窓から入つたものでせう。

『足跡があるでせう。』

燿子がコードを長くして差出した電燈の光で見ると、窓の下の柔らかな土の上には、健一の大きいブルドック型の靴跡の外に、先の尖つた華奢な靴跡が、深々と印されてゐるではありませんか。

『あいつだ！』

健一の頭には、青白い秘書、——杉村三五郎の五分もすかさぬハイカラぶりがはつ



きり浮かびました。こんな山の中で、こんな洒落た靴しゃれくつを穿く者は、あの秘書の外にあ  
らうとは思はれません。

「弱つた、繪圖面が無くては、あれ以上一尺も掘り進むわけには行かない。」

健一はすつかりしよげました。一度潜水夫の死と共に紛失して、この事業を駄目に  
しかけた銅板の繪圖面が、折角發掘が有望になりかけたところで又盗まれてしまつた  
のです。

「お兄様、銅板は盗まれても、あの繪圖面だけならあるワ。」

耀子は不思議なことを言ひ出しました。

「そんな馬鹿なことがあるものか、銅板が繪圖面ぢやないか。」

「え、その通りよ、でも、私、こんなことがあつては困ると思つて、あの銅板を寫真  
に撮つておいたの、幾枚も幾枚も」

「しめたッ、それを見せる。」

「駄目よ、フィルムのままなんですもの、こんな場所では現像も焼付も出来はしない  
ワ。」

「一關まで行つて来る、フィルムを出せ。」

健一はスポーツマンでした、いざとなると、寸刻も躊躇ちゅうちよといふものを知りません。

「私の寫真では危いと思つて、六枚も撮つただけけれど。」

耀子の手からフィルムを受取ると、健一は上着を引つかける間ももどかしく小屋の  
外へ飛出しました。

### 寫真を案内に入る隧道には毒ガス

健一が一關から歸つたのは、思ひの外早くて、その晩の一時頃、手には六枚の寫真  
を持つて、およそ得意満面です。



耀ちやん、大手柄だ、寫眞はみんな上出来だぞ、これさへあれば、銅板なんか重く邪魔つけた』

卓の上——電燈の下に並べたのを見ると、耀子の手際にしては全く見事な出来で、六枚のうち、少くとも二枚は玄人がとつたやうに鮮明です。

『まア、私の寫眞が役に立つなんてをかしいわねえ。』

耀子は有頂天なうちにも、少しきまり悪さうでした。

『ところで、この寫眞でも判る通り、繪圖面の外に、何か引つかきの跡があるんだ、どうも、後で銅板へ書いた字らしいが、どうしても讀めない。』

一番鮮明な寫眞をすかして見ると、成程その端つこの方に、何やら引つかきの文字のやうなものが見えます。

『銅板直接では錆の爲に見えなかつたが、寫眞にとると、青錆が白く映るから、引つかきが浮いて見えるんだ、——とに角、このままではしやうがないから、フィルムへ

鍍金して引きのばして貰ふことにしたよ、明日の夕方までには、使の者が持つて来る筈だ。』

銅板の寫眞に現れた引つかきの文字は、どんな秘密を語るか、それはとも角、夜の明けのを待つて、平泉館の發掘作業は、又一段の勢で続けられたことは事實です。

唐崎莊之介とその秘書杉村、ロイド眼鏡の釣男などは、どこへ行つたか一日姿を見せず、一關の寫眞屋も、日の暮れるまでの引きのばしの寫眞を屈けてくれません。

『どうしたんでせうね、お兄様。』

そんなことを言つてゐるところへ、隧道の入口を見張らせてゐた男が飛んで来て、『隧道の中へ誰か入つたやうです、私と交代で見張つてゐた男が、入口で目を廻してゐますよ。』

青い顔をして報告します。

『それッ。』



と隧道の入口へ行つて見ると、成程一人の男が、重い物で頭をやられたらしく、三人の仲間に介抱されて、まだ悪心地に横たはつてをります。

『僕は中を見て来る、二人はここにゐるがいい、危いから。』

健一は耀子と綾子にさう言つて、隧道の中へ飛込むと、

『大丈夫よ、入口に、こんなに大勢ゐるんだもの。』

二人の少女も續いて入ります。

隧道がつきて、地下の廣場へ一足踏込むと、

『オヤ？』

健一は立止りました。

『何？ お兄様。』

『毒ガスの臭だ、危いッ、引返せッ。』

二少女を小脇に搔込んだ健一、摺剝や瘦を拵へるのも構はず、盲滅法に隧道の入口

に引返しました。

『あれが毒ガス？ お兄様。』

『あ、間違もなく毒ガスだ、あの臭は學校の實驗室で何べんも嗅いで知つてゐる。』

『どうして毒ガスなんかあるでせう。』

『自然に發生するわけではない、人が拵へたんだ、現に、あの廣場の先の小部屋には、倒れてゐる人間の姿が見えたぜ。』

『助けてやりませう、誰だか知らないけれど。』

『マスクでも無きや、あの中へ入れない。』

『マスクなら小屋にある筈だワ、地下の探検は自然の毒ガスでやられることがある。埃及のツタンカーメン王の墓の發掘で大勢死んだのも、毒瓦斯のせゐらしい、僕はマスクを用意して行く——つてお父様が仰しやつたことがあるワ。』

綾子はうまいことを思ひ出しました。



『それはいい鹽梅だ。』

健一が飛んで行くと、お高さんは物置の中から立派な毒ガス除のマスクと酸素發生器を三組も揃へて出してくれます。

健一と燿子と綾子の三人は、毒ガスよけのマスクをつけて、隧道の中に飛込みました。

廣場の先の小さい穴の中へ行つて見ると、懐中電燈を振り照らすまでもなく、二人の人間が死んだもののやうになつて倒れてをります。

差しのぞくと、唐崎莊之介と、その秘書の杉村三五郎。マスクが無かつたら、三人はどんなに大きい聲を出して驚いたことでせう。

廣場の入口のところ、粗造ながら毒ガス發生器が投げ出してあるところを見ると、二人が隧道へ入つたのを見た曲者が、そつと後をつけて來て、ここへ置いて逃出した

のでせう。幸ひ毒ガス發生器は不完全で、よくガスが出なかつた爲に、唐崎莊之介と秘書は辛くも思だけは通つてゐる様子です。

健一と綾子と燿子は、引摺るやうにして二人の男を隧道の外へ出しました。

夜の新鮮な空氣に當てて、少しの介抱すると、幸ひ正氣だけはついたので、見張の人夫に引つ擔がせて、とに角小屋まで運んで來たのはもう十時近かつたでせう。

『いや、翠川君一言も無い、君の義勇と、お嬢さん方の智慧が働かなければ、僕も杉村君も、あのまま死ぬところだつた。』

唐崎莊之介は、ベッドの上からピョコリとお辭儀をしました。かうなると、古風な頬鬚もまことにだらしがありません。

『毒ガス發生器は誰が持ち込んだんです。』

と健一。

『それは判らぬ、——いや俺には判つてゐるやうな氣がするが、證據が無いから言ふ



わけには行かぬ。』

『誰です、それは。』

『いづれ話す機会もあらう、——ところで、命の恩はどうして酬いたもんだらう、翠川君。』

『この發掘事業から手を引いて下さい、萬一利益があれば、それは出資高に應じて分けて上げますから。』

『それは何でもないことだ、私の出資高と言ふのは、——今だから話すが、ほんの少しばかりだ。』

『それは判つてをります。』

『銅板も返さうか。』

唐崎莊之介はよくよく折れた様子です。

『いえ、そんなものはいりません、それより、書生の花井を刺したのと、堤防を壊し

て私達を殺さうしたのは誰だか、その秘書の杉村さんに聞いて下さい。』

健一は最後の疑問を投出しました。

『僕を疑つてゐるやうですが、それは僕ぢやありません、書生を刺したのはとも角、堤防を壊したのは、時々あの邊で釣をしてゐた、ロイド眼鏡の男です。』

『えッ。』

秘書の杉村の言ふことは、全く思ひの外でした。丁度その時、

『一關から寫眞が届きました。』

お高が持つて來た引伸寫眞の包、引きさくやうに開いて見ると、中から出たのは四切の寫眞で、平泉館の地下の寶庫の繪圖面が、銅板の原圖よりも明瞭に見られるばかりでなく、端つこの方に、小刀が何かで引つかいた文字。

——瀧山が私をねらつてゐる、管が切られた、もう死ぬ——  
亂れに亂れてはをりますが、いともはつきり讀めるのでした。



『あッ。』

お高さんは床の上へ崩折くづれました。引伸寫眞のぞを覗いてゐたのですが、夫の斷末魔の苦しみのうちに、自分を殺した相手の名を書いたのを見て氣を失つたのです。

『さう言へば、正平爺やを刺したのも瀧山に違ひないワ、あんな映畫館のプログラムが三冊あつたのは、やはり、途中で一人だけ出て、爺やを刺して、又映畫館へ歸つたんだワ。』

耀子は自分の發見した、プログラムの謎を思ひ出したのです。

『金庫の中の書類を自分だけのものにしたかつたのだ、それから、瀧山が潜水夫を殺したのを、正平爺やが知つてゐたかも知れない。』

唐崎莊之介も口を添へます。この人は金儲むしめに夢中になり過ぎるのと、少し高慢かうまんな癖がある外には、大した悪人でないことが後に判りました。

秘書の杉村三五郎はハイカラで淺薄で、愚にもつかぬ人間で、善いことも悪いこと

も出来る性たちではありません。

『東京へ電報を打つて、助手の瀧山を縛らせよう。』

健一が立上ると、

『それには及ばないワ、あの釣ばかりしてゐるロイド眼鏡は、瀧山に違ひないと思ふの、變裝へんさうして來てゐるんだワ。』

綾子は口を出しました。立花博士の令嬢が見破つたのですから、助手の瀧山がどんなに變裝しても追つきません。

平泉の警察からその晩のうちに警官隊が來ました。翌日は前澤と一關の警官隊が應援して、平泉一帯を山狩やまがりすると、中尊寺の裏山うらやまに天幕テントを張つてゐる瀧山が、わけもなく捕つてしまひました。

潜水夫を殺したのも、立花博士を窮地きうちに陥おとしれたのも、正平爺やを刺したのも、堤



防を切つたのも、花井を刺したのも、みんな助手の瀧山でした。瀧山は實に模範的な悪黨で、平泉の地下に埋まる富を一人占めにする爲に、こんなひどいことをしたのでした。

どうしても白状しなかつたのを、係の検事が燿子から聞いたプログラムの謎から思ひついて、その晩見たと言ふ映畫の筋を聞くと、何にも知らなかつたので、到頭正平爺やを刺したことが判り、それからそれとみんな白状してしまひました。

それはずつと後の話。

瀧山が縛られた翌日、健一、燿子の父親、翠川健太郎が平泉へ來ました。この日、いよいよ藤原四代の榮華を秘めた、高館と平泉館の地下の大寶庫が開かれることになつたのです。

隧道を通つて、廣間の向ふ、地下の客室を開くと、そこはもう山の向側で、八百年來秘められた財寶が、始めて眞夏の陽の下にさらされたのです。

「あッ。」

健一も、燿子も、綾子も、健一の父の健太郎も、お高さんも、唐崎莊之介も、その秘書も、思はず驚きの聲をあげました。

石で疊み上げた、世にも壯麗嚴重を極めた秘室の中には、砂金が一粒、錢が一枚無いのです。

あるものと言つては、藤原四代の榮華を誇る器具と調度と衣類——それも長い歳月に腐蝕して、考古學や歴史學の參考以外には何の役にも立たぬものと、夥しい位牌、佛具、それに古寫經と、素晴らしい古文書の山ばかり。

「これは大したものだ、學者に見せたらどんなに喜ぶか判らない、立花博士が夢中になつて發掘したわけだ。」

翠川健太郎は感慨深く言ひます。

「金は、金は？」



まだうろろする唐崎莊之介。

『金は働いて生み出すものですよ、額に汗して得た金が本當の金だ、——海の底や土の中に、金があると思ふのが間違の種だ。』

『……………』

翠川健太郎や燿子や綾子の方へ向いて續けました。

『これは金よりも貴い物だ、博物館か帝大へ寄附するやうにしよう、今までの費用は私が全部持つ、綾子さんは今日から燿子と姉妹になるのだ、それでいいでせう？——海の底や、土の中に金があると思つて、争ひ合つたり殺し合つたりするのが間違だ。立花博士は金のあることなどは考へてもゐなかつたに相違ない。世間が金を掘り出すものと思ひ込んで騒いだのだ。學者は金よりも古文書や古寫經こしゃきやうや、ポロポロの道具をどんなに貴いと思ふか判らない。』

翠川健太郎がかう言つてゐるうち、唐崎莊之介はゐたたまらなくなつてコンコンと

逃出し、燿子と綾子は、抱き合つて嬉し泣きに泣いてをりました。

八百年にして世に出た、大宮殿を照らす眞夏の白日、それは何といふ明るさでせう。



995  
NK  
○

昭和二十三年六月廿五日印刷  
昭和二十三年六月三十日發行

定價六拾圓

水 中 殿 堂



著 者 野 村 胡 堂

發 行 者 東 京 都 千 代 田 區 錦 田 町 三 丁 目 一 〇  
田 中 長 一 郎

印 刷 者 長 野 縣 岡 谷 市 下 渡 區 五 二 五 一  
站 澤 幸 雄

發 行 所 東 京 都 千 代 田 區 錦 田 町 三 丁 目 一 〇  
駿 台 書 房

配 給 元 日 本 出 版 配 給 株 式 會 社

結 核 印 刷 株 式 會 社 印 刷









駿台書房

